

七曜少女のヒーローアカデミア

ナーシャ・アリティア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日パチュリー・ノーレッジの図書館で、小悪魔がある一冊の見慣れない本を持つてくる。それはなんと……

これは転生した彼女がこの世界に巻き込まれながらも頑張る物語である。

「とりあえず、こんな目に合わせた奴にスペルカード一発当てたいわ。」

尚、少女の目標は少し黒い模様。

文章力は成長していくスタイル。あと設定とか展開がごちゃ混ぜになることも。

思い付きでやっているが故に自己満足な要素が多い上に最初の部分でも手探りな部

分が多く、お粗末な出来ですがそれでもよろしいという方はゆっくりしていただく
い。

目次

プロローグ

唐突すぎる別れと出会いと少女の目標

1

ケンカと励ましと少年の決意

10

デパートにて

22

デパートにてその後

32

七曜少女のヒーローアカデミアその後

頃の幻想郷

44

七曜少女と賢者

49

中学第一学年一学期中間試験

進路とオールマイト

57

69

へドロ事件

82

雄英高校ヒーロー科の筆記&実技試験

104

試験後、進む物語

124

雄英高校

登校と回想と波乱

137

個性把握テスト

144

個性把握テストその後

168

戦闘訓練

179

戦闘訓練と動き出す闇

196

委員長決めと事件の足音

207

USJ編

USJ編の前編

219

プロローグ

唐突すぎる別れと出会いと少女の目標

SIDE：パチュリー・ノーレッジ

私はいつも通り、大図書館で読書に明け暮れていた。

「あら、この『風の魔法〜自在突風編〜』にある魔法、面白いわね。これをSP「パチュリー様ー!」……」

……何よ、こあ。

何回も言うけど、ここは図書館よ。もっと静かにしなさい。」ギロツ

私はこあをギロリと睨む。

「すつ、すみません。」

こあはピクリと肩を跳ねさせた後、少し怯えたように震えた。

……まーたこあが騒いでいるわね、これで何回目だと思ってるのよ。今度やったら口にあの巫女お手製のを真似て改造した口封じの札貼ってやろうかしら。

少し呆れながらパタンと本を閉じる。

「んで、用事は？できれば手短に済ませて欲しいのだけれど。」

私はあまり本気にせずにこゝに聞く。

まーたあのときみたいなのがあつたら今度はどうしてやろうかしら？

「こゝ、これなんですけど。」（こつ、こわいなあー）」

そう言つて、こゝは怖がりながら私に一冊の本を見せた。私はその本の表紙を確認してみる。なにになに……あれ？

「私には見覚えのない書物なので、パチュリー様に聞けば何か分かるかと思つたのですが……」

「ふむ、『転生の書』……？」

こんな本あつたかしら？こゝ、これはどこに置いてあつたの？」

「450番目の本棚の上です。」

まださつきのことが残つているのか、こゝはどことなく恐怖しながら言う。

へえ、この図書館の中にある本は全て読んだことあるはずだけどタイトルといい装丁といい、何から何まで見覚えがない。

あの白黒の忘れ物かしら？

……まあいいわ。とりあえず読んでみましょう。もしかしたら新しい知識が身につくかもしれないし。私は本のページを何となしにめくつてみる。

「うん。特に異常はな・・・い？」

「ーーーー突如、ページが勝手にめくれはじめた。」

「え？」

咄嗟に手を離すが、まるで風邪でも吹いているかのように本はひとりでページをめくっていく。

「え？」「ふえ？」

私達は呆然とそれを眺めていた。

「ーーーー数十秒後、止まった。軽く確認したが、特に異常な魔力反応は見られず、周りにさほど影響があるわけでもない。」

「何だったのかしら」

「と不思議に思い、私が本に触れて閉じ」

「え？」

「・・・ようとした。」

触れようとした本は複雑な紋章を記しては消え、記しては消えを繰り返す。書かれた文字はその形を変化させ、ぐにやりと曲がる。何度も何度も言葉があふれてくる。

「ーーーーそして突如本から光が溢れ、複雑な魔法陣が出現し、その光がわたしを包み込んだ。」

「パツ、パチユリー様あああああ!」

小悪魔の悲鳴が響くと同時に、突如、私の視界は暗転した。

——のちにこれを見ていた小悪魔は語る。

「あのパチユリー様が反応せず、抵抗できずに呑み込まれて消えた……」

これは、何か大きな異変の前触れ違いありません!」

なお、幻想郷に直接の関係はない模様。

——
うーん、うん?

ドクリ、ドクリとリズムカルに心地よく揺さぶられるような感覚で私の意識は覚醒した。

ここは何処かしら?

暗いわねえ。明かりをつけてみましょうか……

つて、あら? つかないわね。そんなはずは、もう一度……

つかない。いくら試してみても光はおろか、魔力すら感じる事が出来ない。私は驚いた。そっそんなあ……どうすればいいのよ……

とりあえず動いてみて……え?

動けない。手も足も縛り付けられたように1ミリすら動かせない。…マズい。

魔法が使えないとなれば脱出も絶望的な確率となる。私は焦りを感じていたが、音が私を落ち着かせた。ドクン、ドクンと心地のよい振動が感じられる。改めて聞いていると、どこか昔聞いたような…そんな懐かしさを感じさせる音だった。

ふむ…どういふことかしら？

ザー…

うん？ノイズかしら？突如、どこか懐かしさを感じさせるノイズがはしる。不清明ではあるが、何か会話らしき音も確認できる。

ザーザツザーザツザーザツザツザツ

それは、徐々に大きくなり、脳内にキーンと響いた。鼓膜を震わせ…否、破らんとせんばかりの音だ。私の意識は痛みで朦朧としてくる。何度も儀式で痛みを経験しているが、これは初めてだ。

(…痛、い何でこんな、あ、ああああ!?)

突如、私の体が動いた。

そして、

つまり、あの本を置いた奴がいるってことよね。それも、私に気づかれずに置けたことと、幻想郷に介入できる奴ということは恐らく相当強い。魔力もあちらが上。

そして、今私は魔法が使えない。私は今赤ん坊。ただでさえ低い体力が更に落ちた上に、行動範囲が壊滅的に狭くなる。

……よし。とりあえず

————こんな目に遭わせた奴、覚悟しとけ。

若干キレながら私は心の中でそう誓う。

「あら、可愛い子ねえー。」

「ああ、そうだね。」

ん？あらか？

回復してきた聴覚に男の声と女の声が聞こえ、私はその方向を向く。

もしかして今の私を抱き上げている女性が今の母親で、覗きこんでいる男性が今の父親かしら。

今の私が生まれたばかりだから、間違いは無いと思うけれど……

「ねえ、この子の名前どうする？」

「うーん、迷うなあ。」

．．．．．心の底から喜んでる表情をしているわね。

初めて授かった私という命を見て、持って、感じて幸せなのでしょう。

だとしたら、子供である私が無愛想なのは悲しいだろうし、少し気の毒ね。

なら――

「だう。」パッ

私は手を精一杯伸ばした。

「あうあーっ」

彼らは一瞬目を見開いて驚き、

――小さな小さな私の手をにぎった。

それはすごく暖かかった。

暖かい感情が、笑顔が、雰囲気、私の心を満たしていくのを感じる．．．．．どこか懐かしい。

（今頃皆私を探しているわよね。帰る方法が見つかった

ら――）

「だうあー♪

（あの本を入れた奴にスペカを一発命中させてから帰りましょう♪）「ニッコリ
—————この赤子のドス黒い感情に、親バカな両親は気づいていな
かった模様。

魔法使いであり、皆と別れ、新しい家族と出会ったパチュリー・ノーレッジ。

これは、そんな彼女の物語である—————

To be continued……

ケンカと励ましと少年の決意

SIDE：緑谷出久

これは、僕がヒーローになると決意したある幼少期のある日の話。

「デクウ……」

「ヒイ!？」

「無個性のクセにヒーローをきどってんじやねえよオ……」

かつちゃんがそう、怖い笑顔で言った。

——かつちゃんがいじめっ子になってしまったのだ……

僕はその時、後ろにいる子を庇いながらも、内心怖くて震えていた。

——つい最近までは、

『かつちゃんの個性すごいなあー!』

ぼくにもはやく個性でないかな〜』

『デクがどんな個性だろうと、俺にはいっしょうかなわねえつつうの。』

——リーダーみたいなその背中がかっこよくて、そ

の背中に憧れていた。その負けない安心感を感じさせる笑顔が、雰囲気を引き寄せられていた。

だからその時、そんなかつちゃんがいじめっこになってしまったことに悲しさ、止めなくちやいけないという正義感が出てきた。今思えば幼かったからできたのだろう。

僕はにげなかった。

だから

「ごれい」じょうはつぼうがゆるぎないぞつ！

僕は立ち上がり、

君がそんな悪い奴みたいにしてほしくない！そう思い、勇気を出す。

思い浮かべたのはオールマイト。

正義のために活動する、強くて優しいあのヒーローに僕は幼少期のころから憧れていた。

その勇姿を、精神を思い、自分を奮い立たせる。

（僕は、君を止めたいんだ　ooooooooooooッ！）

「ちようしにのつてんじやねえ！」ガッ

そう言つて、かつちゃんは個性を発動させながら殴りかかってくる。その視線は見ているだけで怖かった、恐ろしく感じた。今でもそれは鮮明に覚えているから一種のトラ

ウマというやつなのかもしれない。

ダメだと感じるごとに、少し周りの動きが、時間が、遅く感じられてくる。
(もうだめだ。)

そう思い、ぎゅつと目を閉じた

(でもせめて、きみを少しでも止められたなら……)

少し不思議な安堵感を感じながら僕は立つ。もう逃げる事が出来ないのだから諦めよう。そう思いながら僕は笑った。

そして僕に激痛が襲う……

——はずだった。

おかしい。もう当たって自分が吹き飛ぶはずだ。いくら待っていてもそれは来ない。

(あれ?)

と思い、目を開くと……

目の前に

「—————悪いけど、読書の邪魔はしないで欲しいわ。」

—————光かがやくなにかと、気だるげそうな声でひよ

いと攻撃を防ぐ小さく、けれども大きな紫髪の子の背中を見た。

S I D E : パチュリー・ノーレツジ

私がここに来てから五年近く経ったある日、

私は新しく製作した魔導書を公園のベンチで読んでいた。

ざわ・・・ざわ・・・

(・・・ん?)

何か騒いでいる声が聞こえたため、耳をかたむける。

「無個性のクセにヒーローをきどってんじゃねえよ・・・」

「ごれい」じょうはつぼうがゆるぎないぞつー!

(・・・読書の邪魔ねえ)

しかもあの二人組、いつしよの幼稚園に通っていた

緑谷出久と・・・ああ、あのガキ大将っぽい感じの爆豪勝己ね。

話の内容や形相からして、どうやら何か争っているようねえ・・・

どうやら、緑谷の後ろにいる子どもを庇ったためにああなっているのかしら。

つてことは、事の発端は爆豪つてことかしら?

よし、止めましょう。

「……………」このとき、爆豪は気づいていなかった。

己より強い者は、その実力を他者から隠していたことに。

『能ある鷹は爪を隠す。』

「……………」その捕食者である鷹が、自分の近くにいたことに。

「……………」あつちがこつちを先に邪魔したんですもの。

なら、こつちが邪魔しても良いわよね。私は少し微笑む。

「ちようしにのってんじゃねえー」

爆豪が緑谷に殴りかかると同時に私は緑谷の前に移動し、本で発生させた魔法陣でそれを止めた。この魔法は今はいまうまく扱えてはいないのだが、この程度の爆破なら余裕で受け止められるだろう。

「っ!？」

個性を目の前で使った私に、驚いた爆豪は距離をとる。

「悪いけど、読書の邪魔はしないで欲しいわ。」

本を閉じ、私はそう静かにいい放つ。

爆豪が信じられないというように目を見開きながらこちらを見る。

「……」そりやそうよね。私は必要性を感じなかったから皆の前で個性を使ったことは無いもの。

ま、そのせいで周りからは無個性扱いされていたけど。

「パチユリー！お前無個性じゃなかったのかよ！」

「あら？いつ私はあなたに対して『私は無個性だ。』と言ったかしら？」

「ぐっ……」

爆豪はその言葉に押し黙る。はあー。やっぱりそういう勘違いするあたり、他とはずば抜けていても子どもは子どもねえ。

「……じゃあ！何でお前が俺のじやまをするんだよ！」

「貴方が私の読書を邪魔したからよ。だから私は貴方の邪魔をする。ただそれだけ。」

爆豪がただでさえつり目なのにその目をもっと吊り上げて物凄くこちらを睨んでくる。これが俗にいうヴィラン顔ってやつなのかしら？恐らくこちらしか見えていない上にまた攻撃を仕掛けてくるつもりだろう。

はあ、面倒この上ない……

「ちようしにのつてんじゃねえ！」

爆豪が個性を発動させて殴りかかってくる。

「はあ……呆れた。」

私は大きいため息をついた。

そして、私が今手に持っていたものを投げた。

「!?!」

爆豪が「それ」からでた鎖に巻き付けられ、身動きが取れなくなる。

「おお、上手くいったわね♪」

私が投げたのは、あの紅白巫女のを魔力で使えるように改造した御札だ。

対象のいる地面に投げると魔法陣を出現させ、そこから鎖を生み出して対象を拘束する仕掛けとなっている。

この利点は、魔導書のように本がめくれる時のようなタイムラグやその場での魔法の消費が無いことだ。

さらに、あの巫女のように一杯投げること無く拘束することができる。サブウエポンとしても利用可能だ。

「……………弾幕ごっこでは相手の動きを一瞬止めるだけになるけどね。」

ちなみにこれは、あの泥棒白黒を取っ捕まえる為に開発した試作品だ。実践をする前にこちらに来てしまったのは残念だけど。

それはさておき。

「悪いけど、貴方にはちょっと眠ってて貰うわよ。」パチン
私は指を鳴らし、簡単な魔法を使う。

「なに………を………いつ………」バタツ

そう言つて、爆豪は地面に崩れ落ちるようにして倒れた。これは眠り薬を使えない状
況下で使うような魔法だ。連発ができないのが難点だけど。

さて………と。

「………あんた達、」ピシツ

私は後ろにいた奴等に指を指す。

「「ヒイ!」「」ビクッ

「コレ、私が行ったら起こしといて。頼んだわよ。」

「「え?」「」

拍子抜けたように三人組が言葉を溢す。

「良いわね?」ニツコリ

「「アツハイ。」「」

私が少し殺意をのせて笑いながら言うと、
“快く”承諾してくれた。

「……………」のちに少年達は言う。

『あのときの彼女の笑顔はただのヴィランよりずっと恐ろしかった。』と。

さて、と……………私は帰りまし「あっあの！」

……………

「……………何よ。」

「た、助けてくれて、ありがとう！」

そういつて彼は深々とお辞儀をする。どうやら私が助けたのだと思っているらしい。

はあ、勘違いね。

「私は別にあんたを助けた訳じゃ無いわよ。」

「つそ、それでも！ぼくにとつてきみはぼくを助けてくれたヒーローだよ！」

ヒーロー、か。

私には向いてないし。

それにしても。この子、健気ねえ……………勇氣もあるし、

「私よりも貴方の方がよっぽどヒーローっぽいわよ。」

私は、思ったことをそのままいった。

「……………!!!」

そうすると、彼は一瞬驚いた顔をし、喜んだあと、落ち込んだ。

「……………百面相みたいね。」

「でも、ぼくは無個性なんだ。だからヒーローにはなれない。」

彼の表情にはあきらめが感じられる。私はその顔に少しの苛立ちを覚える。諦めるということが可能性を否定すること。知識と神秘の可能性を追い求めるのが魔法使いの在り方で私の在り方なのだから。

「諦めているからよ。」

「え？」

「何で個性が無いだけで諦めているの。そこで諦めるからなれないんじゃない。」

「……………ヒーローに必要なのは、人を救おうと思う心と、

それを実行しようとする努力よ。」

「つつく!!!」

緑谷が泣き始めた。

『Plus Ultra』よ。

頑張んなさい。」

「……………うん!」

—————我ながら綺麗事並べたものよね。励ましの言葉なんて、らしくないわ。

あの白黒の影響かしら。まあ、Plus Ultraは、叔父さんが言っていたことだけだ。

……でも、

たまにはこんなことを言ってみるのもアリっちゃありね。

私は何故か清々しく、温かい気分のまま帰宅した。

SIDE：緑谷出久

『何で個性が無いだけで諦めているの。そこで諦めるからなれないんじゃない。』

ヒーローに必要なのは、人を救おうと思う心と、

それを実行しようとする努力よ。』

『Plus Ultra』よ。

頑張んなさい。』

その時の僕は彼女がいったその言葉を思い出し、噛み締めていた。

その言葉は、あの日の僕を救った。僕の背中を押してくれた。

だから、僕はその時決意した。

—————必ず最高のヒーローになってみせると。

To be continued.....

デパートにて

side : パチユリー・ノーレッジ

私は今、デパートに買い物に来ている。

何故かって？

「パチエ、こんな服はどうかしら？」

「そうだぞ！あまり外に出ないとはいえ、女の子なんだからもうちよつとお洒落しないと。」

「……この両親親力共に無理矢理つれ出されたからだ。

服を着せようとしているのが、上から長髪のサラサラした黒髪で黒眼の母親

そして、金髪で翠眼の細い体した西洋風の父親。

「……あまり外にはでないとは失礼ね。魔法の研究よりも外に出ることはあまり大事じゃないからよ。」

「……それに、私の個性で作っちゃえば良いじゃない。面倒くさいわね。」

実際そうだ。私の個性は応用が聞きやすい。凄く便利なのだ。

「もー！子どもらしくないわねえ。たまには『わー！ありがとう！パパとママ大好き！』って言うてくれてもいいのよ！」

だがこの母親、それを分かっているも勧めてくる。

あと、声真似するならもうちよつとどうにかしなさいよ……というかもはや気持ち悪い。

「はあー。あなた達が子どもすぎるのよ。」

呆れながら私はそうツツコミを入れた。

実際そうだ。親バカすぎて正直少しうつとおしい。

……嫌な感じはしないけど。

でも、母さんはうるさすぎね。

このまえだつて叔父さんの家に（連絡なしに）行った（押し掛けた）とき、姉さんは家族とかにはとことん甘い。鬱陶しいぐらいにな。

だからあまり可愛がりすぎるのはやめておけ。」

と、ビシツと呆れながら指を指されていた。

それに対して不服そうに母さんは、

「えー？何でよ。」

と文句を言った。どうやら話の本質を理解していないらしい。昔から世話焼きとい

うか可愛がるのが大好きな母さんは、今も昔も変わっていないらしい。
「そういうところだ。」

ほら、見てみるよ。呆れられてため息まで出ているぞ。」

彼はこちらに向かつて指をさしながら言う。そして私は、

「はあー……」

と、母さんをジト目で見てため息をついた。

「ちよつーパチエー！そんな顔で見ないで！」

「はあー……」

そして叔父さんは死んだ魚の様な目でため息をついた。

「こらー！あんたまでため息つくんじゃないわよ！」

母さんは怒っている。だが、覇気がない。

それに対して叔父さんは眉間に皺を寄せ、

「あと、何か見つけたらすぐ寄り道するのもやめておけ。思い立った瞬間に行動に移すのよな。」

そのせいで姉さんいっつも遅刻してたろ。

そういう所がつくづく合理的じゃない。」

と、付け加えた。

すると、

「ええーん！リックウー！弟と娘がいじめるう！」

これは母さんに大ダメージ。

父さんの元へ慰めてもらうために走っていった。まあ、母さんのことだ。一日……いや、一時間経ったら忘れているだろう。

(はあー……)

呆れてため息しかでない。

明るいのはいいけど、うるさいのはちよつと……ね。

私はそれを見送った後、ふと視線を戻すと私と同じように疲れた感じの叔父さんと目があつた。そして、

「はあー……」

と、同時にため息をついた。

と、こんなことがあつたのだ。

あれから少し静かになつたけどさすが母さん。

三十分でいつも通りに戻っている。

—————まあ、嫌な記憶をすぐ忘れられるのは尊敬する

けどね。だけど、

少しは学習しなさい。

で、今服を持ってきて着せ変えようとしているが、

服選びとか正直面倒くさいので

「ちよつとトイレ行つてくる。」

と言つて逃げた。

「あつパチエ！待つて！」

父さんが来るが、私は人混みの中に紛れて逃げた。そして、出る瞬間に認識阻害の魔法をかけた。

「さて、と………?」

私はどうしようかと周囲を確認してみる。うん?あそこに………

………マスクを被つた男?それも複数………

何をするのかと観察していたら、そいつは銃を前の男に突きつけ、

「五分以内に金をだせ!さもないとこいつらを十秒ごとに一人ずつ殺すぞ!!」

と言つた。

あつ強盗か。ちよつと不味いわね………

十分以内か………ここら辺にヒーロー事務所は存在しない………

あつても二十分はかかる……

———そうだ。

(私が拘束しましょう。)

———この少女に逃げるといふ発想が存在していない。
い。

(でも、引き金に指をかけているから下手に接触しない方がいいわね……)

そうだ！中身を全部念のため石と入れ換えましょう！)

私は紙切れを取りだして契りそれを小石に変えた。

分かりやすく言うのと、変身術だ。

そして……

「———」

本を取り出して詠唱する。

すると

シュツ (成功ね♪)

———少女の手元に沢山の弾薬が来た。

そして出た瞬間に少女が小さな袋の中に入れた。
だが袋はしぼんだままだ。

さて——————

(少々目立つけど、人が死んだら後味が悪いのよねえ。

——————さて、久しぶりに暴れますか！)

——————少女が取り出したのは魔法書。

それと一枚の紙切れ。

そして、髪を青色にし、服装をフードに変え、目元を隠す。心なしか口元が笑っているように見える

——————この少女、普段よりノリノリである。

ここからは一方的な戦いとなるだろう。

私は認識阻害魔法をド真ん中解く。

突然現れた私にヴィラン達は驚き、そしてニヤリと笑う。

「おい！あそこにも子どもがいるぞ！」

「しかも上玉じゃねえか！あいつは売ったら金になるぞ！」

と、相手が笑い銃を構える。私は少し苛立つ。

「下手に動くと撃つぞ？こっちに来い！」

「いい子だからこっちにおいで〜」

ヴィランが手招きする。

だから、私は笑顔で

「いやよ。」

と言った。

「………は？」

リーダーっぽい奴が呆けたように言う。こいつは言っていることの意味が分かっていないのか、という感じだ。銃はこちらから照準が外れて言っている。

「お、おい嬢ちゃん、そのへんにして、こっちに来い。」

下っ端っぽいヤツがリーダーのほうをちらちらと見ながら言ってくる。しつこいわねえ……ため息をつきながら私は相手に言う。

「………もう一度言うわ。」

変態でロリコンな外道の方達に付いていくのは丁重にお断り致します。」

と、満面の笑みで丁寧と言った。もちろん相手の怒りを誘うためだ。

プツンと、何かが切れる音と共に。

「こんのクソガキアアアアアア！」

と、ヴィランがキレた。

しかも人質を放つてこつちに一直線だ。ことわざで表すなら猪突猛進だろう。

よし♪煽りにノツたわね。

ま、がむしやらに個性使ったとしても結界が張つてあるから外には傷ひとつつかないし、おまけに

バチツ「ギヤア!?!」

こんな風に内側からは逃げられない。

よし。

「さて、

ちよーつと痛い目に遭つてもらおうわよ。

ー水符：プリンセスウンディネ〜e a s y〜ー」

そうスペルカード宣言すると、私は手を前に突きだす。

するとそこから水のような物体が出てくる。

そして、後ろの魔法陣から水色の自機狙いのレーザーが出てくる。

それらの弾幕にヴィランが当たると……

「ぎゃあ!？」

弾幕が爆発し、悲鳴を上げて倒れた。

「おっおいどうした!」

と錯乱しているところに御札を投げて倒れた方と一緒に拘束。

そして私は次々と拘束していき……

「ふう、ぎつとこんなもんかしら?」

でも、ちよつと弱いわね……」ボソツ

肩慣らしにはなつたけれど、相手が弱すぎるわね……

—————そのうしろでは、二十人程の男達が御札で拘束してまとまっていた。

ここまで僅か一分である。

さて、ヒーロー達はまだかしら?

なお、ヒーローが駆けつけたのはそれから二十分後であった模様。

To be continued……

デパートにて〜その後〜

SIDE：相澤消太

俺は今、デパートで強盗があつたという知らせを受け、何人かのプロヒーローと一緒に来ている。

今回のヴィランは後ろに大きな組織があるかもしれないらしい。

「お、おい！なんでこっちにヒーローg」ドスッ

「な、個性が使える」ドカツ

「なつまさかこいつh」ガンッ

「気をつけろ！こいつはイレイザーヘッド」ドカツ

ヴィランが個性を使って襲いかかつてくるが、

俺は個性を使い、マフラーでそれらを捕縛する。逃げたやつは・・・

「ヘイ！イレイザー！耳塞げ！」

俺はその聞きなれた掛け声を聞き、咄嗟に耳を塞ぐ。

スウー

「YEAHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH!!」

マイクが個性を使い、声で敵を気絶させる。

耳を塞いだが、馬鹿みたいにデカイ声がキーンと、頭に声が響く。

まあ、逃げたやつはこれで捕まえるのが一番だ。

……だが、とりあえず一言。

(……うるせえよマイク。

下手したら鼓膜割れるぞ。)

そしてヴィラン達に目を向ける。

……全員ぶつ倒れ、痙攣している。まあ、気絶で済んでいるだけマシなのだがこれはさすがにひどい。

まあ、それはそれとして。

「おいマイク、人質の救出に向かうぞ。」

「OK！ さっさと行こうぜ！」

俺たちは上へと走り出した。

トットトットトット

無機質な音が階段に響く。

俺たちは走りながら会話をする。

「・・・・・・・・・・にしても妙だ。」

「何でだ？」

「あいつら、迎撃に来たっていうより、逃げてきたって感じた。」

俺はさっきのヴィランの態度を思い出す。

『な、なんでここにヒーロー』ドスツ

・・・・・・・・俺が見た限り、あのヴィラン達は俺たちを見て明らかに動揺していた。

ヒーローが来るのは想定外というか、逃げ道を塞がれて驚いている感じだった。

しかも、逃げてきたようだ。

「・・・・・・・・・・そう言われてみれば、そうかもしれないな。」

それに、ここまで誰も居なかったし・・・・・・・・・・

まさか、他にも別のヴィランが・・・・・・・・・・」

「まさか、な。」

—————その可能性を考慮し、俺たちは上へ上へと、連

絡があつた階層へとかけ上がり、向かう。

非常扉を開けた先には……

「……は？」

……そこには、どこか見覚えのある青髪の六歳前後位の少女が、ざつと数十人ぐらいいるヴィランらしき人物達の前で本を読みながら立っていた。

……興奮した姉さんと一緒に。

……俺は状況をすぐ理解し、

(何やってんだアイツ……！)

とりあえず目が死んだ。

side：パチユリー・ノーレッジ

私は今、警察から事情聴取を受けている。

「何で君はあそこで助けに向かったんだい？」

「人が目の前で殺されていくのが嫌だったからよ。」

面倒くさいわねえ。ただの六歳児を何でこんなに疑ってんだか。ま、こんな風に冷静だったらそりや不信に思うでしょうね。

私は表情を一切変えずに淡々と述べる。

「自分と他の人たちが危険なのは考えたかい？」

「ええ。」

だから、銃弾は全て小石と入れ換えたし、こちらに注意が向いた瞬間に人質を私の個性で張った結界の外に移動させたわ。」

「……………」

刑事は唾然とした後ハツと我に返ると黙って考え事をし始めた。

ふむ、さっさ帰してくれないと面倒ねー。

早く帰って魔法の研究とかをしたいんだけど。

「……………もう帰っていいよ。今回は嚴重注意「私が普通にドアから来た！」……………ええ？」

そう言って、金髪の筋肉がすごい奴が出てきた。

何なのこいつ。画風がちがうわね……

「こんにちは少女よ！今回のことはちよつと危険だけど、その正義感と行動力はその幼さにしては凄いものだ！君にはヒーローになる素質がある。」

そんなに言われても、私に期待するだけ無駄だともうわ。

「……このおっさん、何処かで見たことがある気がするけど誰だっけ？」

「……えーつと、誰？」

そう言うと、目の前の大人達は驚いた。

「っ！もしかして、この人のこと知らないのかい!？」

「うーん？何処かで見たことがある気がするけど……」

あつ、もしかしてオールマイト？」

「そうさ！ノーレツジ少女！私 came 来た！」ピシッ

そう言つて、決めポーズを取る。

あー。何処かで見たことがあると思つたら、出久がいつつも言っているヒーローのオールマイトね。

「ごめんなさいね。私あまりテレビとかは見ないものだから。」
「そうか……」

少し諦めた表情で刑事さんがそう言う。

それはさておき
閑話休題

「で、そのヒーローさんが何の用？」

「お、おう！そうだったそうだった」

—————君の個性、誰からか貰ったものかい？

ふむ……？誰から貰った？どういうことだろうか？

「質問の意味がよくわかりません。」

「うむむ……そうか。」

じゃあ、君の個性は？」

「私の個性は『魔法使い』。

異形系と発動系の両方を合わせ持つ個性よ。」

「例えば、どんなことができる?」

「すごく踏み込んでくるわね。是が非でも聞きたいって感じ。」

「そうね……」

一旦、刑事さん達は出ていってくれないかしら?

あと、外で盗み聞きしている叔父さんは入ってきてくれる?」

「……」

難しい表情をした叔父さんが入ってくる。

盗み聞きして私にバレないでも思ったのかしら?

まあ、良いわ。

私は盗聴・盗撮防止魔法をかけ、

『火水木金土符：賢者の石』

そう私はスペルカード宣言をし、本を手に取り構える。

すると、私の前に魔法陣が現れ、そこから五つのクリスタル状の物が出てきた。

「……これは……」

「おっと、手で触れない方がいいわよ。」

手で触れようとしたオールマイトを止める。

「……これは？」

「賢者の石」

「……もう少し詳しく。」

「はあ……」

く少女説明中く

「分かったかしら？」

「お前がその年としては……というか、並みの大人より頭が良いことが分かった

……お前、何者だ？」

叔父さんが私を睨んで言う。

「さあね？個性が発現したら、これに関する情報とかが頭の中に入って来たのよ。

……嘘じゃないわよ？」

あのとき、頭痛が収まらなくて大変だったんだから。」

情報云々は嘘だが、頭痛については本当だ。

あのときは膨大な魔力が一気に来て気絶した程だ。

それについては母さんが言っている筈。

叔父さんはこちらの表情を読もうとし、一瞬怪しそうに睨んだが

「……………まあいい。あの人の娘だ。あり得ないことはないな。」

……………母さん、叔父さんにこう言われるなんて、一体何をしたのよ？

「個性についてあまり知らせるなよ？」

情報が漏れたら面倒だ。」

と言つて私の頭を軽く撫でてから立ち去る。

むこうでギヤーギヤーとうるさい声が聞こえる

……………まあ、あの母さんと何か似ている叔父さんの同僚だろう。

まあいいわ。

さて、今私はオールマイトと部屋の中に居る。

私はさっきの質問について考える

誰かから貰うと言つていたわね……………まさか、

「……………もしかして、誰かから個性を奪つたり、与えたり

する個性が存在するのかしら？」

「!!」

オールマイトは驚きの表情を見せる。やっぱり。予想をただ言っただけだけれど、こ

の反応から見て間違い無いようね。

そして、さっきの態度から推測すると……

「そして、その人物のことを貴方が知っている……」

それもそんなに険しい表情をするのなら多分ヴィランね。

大方、まだ捕まえられていない。もしくは、まだ尻尾を出すのを待っているという形

かしら？

まあ、あくまで私の推論でしかないけれど。

……でも、当たりみたいね。

まあ、あまり詮索はしないでおくわ。」

オールマイトは少し考えた後、

「……ありがとう、ノーレッジ少女。

私は、その「ヤツ」の尻尾がまだ掴めていないんだ。」

と、どこかを睨みながら言った。

「さて、私は帰るけれど一つ言っておこう。

—————君は、間違いなくヒーローになれる

—————来いよ、ノーレッジ少女

私達ヒーローが待っている世界へ。」

彼は、笑ってそう言った。それに対して私は……………

「まあ、考えておくわ。」

とニツコリと微笑んで答えた。

T o b e c o n t i n u e d

七曜少女のヒーローアカデミア〜その頃の幻想郷〜

SIDE：レミリア・スカーレット

「パチエが消えた!？」

そう、こあから知らせを受けたのは、アフタヌーンティーを楽しんでいた時だ。

パチエは昔からの友人で、魔法使いの中でもすごい『種族：魔法使い』だ。

「え？、あ、パツ、チエ？」

私は酷く動揺した。

突然、大切な友人が消えてしまったのだから。

「……………お、お嬢様、大丈夫ですか？」

「……………っ！」

……………どうやら取り乱していることが態度に出ていたらしい。

(落ち着け、レミリア・スカーレット。)

紅魔館の主であり、誇り高き吸血鬼が取り乱してどうするの。

今すべきことは冷静になり、状況を理解することよ。)

私はそう自分に言い聞かせ、冷静になる。

そして、

「……………詳しく聞かせてもらえるかしら？…こあ？」
と、こあに聞いた。私は焦りながらも犯人にはめぼしはつけている。

S I D E : 八雲紫

「……………一体何の用かしら？吸血鬼さん達？」

私は目の前に居る二人の吸血鬼とその従者達に話しかける。

「……………パチエはどこよ？」

「…え？」

震えながら吸血鬼は言う。その声はとてもか細い。

「しらばつくないで！パチエは何処よ!？」

「お、お姉さま。」

「……………やり取りを見るに、どうやら聞き間違いでも冗談でも無
さそうね。私は冷静にそう考える。」

「どういふことよ？」

「パチエが突然消えたのよ!？」

「こんなこと出来るなんてあんたしかいないじゃない!？」

「落ち着いて！お姉さま！」
なるほど。

つまり、誰かが私に認識されずに博麗大結界を通り抜けたってことね。

そんなこと、この幻想郷を現実から隔離して結界を張った私にバレずに出来ること
じゃないわね。

いるとしたら・・・それは凄く厄介で危険だわ。

・・・下手をしたらパチュリー・ノーレッジどころか幻想郷まで危険なぐら
い大きな異変なのかもしれないわね・・・

「一つ言っておくわ。私は犯人じゃない。」

「……………!?」

目の前の吸血鬼は動揺した。

私は

「……………だから、落ち着きなさい。私も捜索に協力するわ。」

幻想郷の賢者として・・・ね？」

と、落ち着かせる。今の彼女は冷静さに欠けている。突拍子もないことをされてしま
ったら危険だ。

レミリアは落ち着き、

「……………ほ、本当にあんたじゃないの？」

「ええ。じゃなきや、こんな嘘つかないわよ。」

何処か気の抜けたように彼女はへたり込み、こちらを見る。

「じゃあ、一体誰が……………」

「……………それを今から探すのよ。」

「藍！」↑八雲『藍』では無くて八雲『籃』になってましたよ

私は一番信頼できる式神を呼んだ。数秒も経たない内に、シユタツ「お呼びでしょうか、紫様。」

九尾狐である式神、八雲藍が現れた。

私はすぐさま、

「結界の内部に誰かが意図的に侵入したかもしれないわ！

大至急、博麗大結界に何か損傷が無いか確認して！

巫女にも協力要請を！

私は結界の外に痕跡が無いかを確認するわ！」

と指示をする。

それに対して藍は

「はっ！」

と答え、その場から消えた。

(「———— 一体、何が起きているのかしら。この幻想郷で)

「————」パチュリィ・ノーレツジが居る場所が特定されたのは、その三日後だった。

T o b e c o n t i n u e d

七曜少女と賢者

SIDE：パチュリー・ノーレッジ

「はぁー……」

私は頭を抱えた。

時を遡ること二時間前

私は事情聴取やらオールナイトと話したやらが終わった後に帰っているときに、黒い服を着たなんか胡散臭い（皆からチラチラ見られていた）奴が

『さつきは助けてくださってありがとうございます。なので、貴女にほんのプレゼントを差し入れます。』

と言つてなんだろうとおもつて尋ねようとしたら、瞬きした隙に消えた。
不思議だと思つて家に帰ったら、

「……あら、

フツッ こんにちは。」

と、あら不思議。

今度は口元を扇子で隠して含み笑いをしている胡散臭い賢者さんがいたのだ。とりあえず私の目が死んだ。

そして現在に至る。

さて、

「なんであんたがいるのよ。」

紫は神出鬼没な妖怪だ。気紛れか、もしくは異変か。

妖怪の賢者が動くなんて、きつと面倒くさいことこのうえない異変に違いないわね。

「もう、失礼ね。貴女を探して欲しいと貴女の友人である吸血鬼さん達に頼まれて、色々探して来たのに。」

ゆかりん泣いちゃうわ。」

それを聞いて驚いた。

そして気がついた。私がいなくなっていた間、レミイ達はどうなったのだろうか。

なぜ、今までそれを忘れていたのだろうか。

「私、六年ちよつといなくなっていたんだけど、その間何かあった!?レミイ達は元気にし

てる!?! 戻るためにはどうしたらいいの!?!」

「ちよつ、さつぎのこと無視!?!」

そんなことはどうでもいい。今、私はあつちの状況が知りたいのだ。

「答えて!」

「—————落ち着いて。今からそれを話すわ。」

私を宥め、スキマ妖怪—————基、八雲紫が真剣な表情になって話始める。

「まず、貴女が六年ちよつといなくなっていたことについてだけど……………」

「こちらの時間では、まだ六日しか経っていないわ。」

「……………え?」

どういうことだ? こちらはもう六年も経っているというのに……………うーん。

私は色々な仮説を立てて考える。

(地球の様に日付変更線の様なもので時間の経ち方が変わっている? いや、それだと双

方の時間の流れ方に説明が付かない。

なら、境界の外側と内側で時間の流れ方が違う？

それならなぜ？

分けておく必要があつたから？

それなら強さか？いや、妖怪とかの勢力がこちらに劣る様な事はない。

こちらの“個性”は肉体に依存するもの。対して幻想郷の住人達の“程度の能力”は精神、又は種族的な力が強化されたり、突然開花していく。自分の魂、存在の中に含まれている。それに加えて元々の力、または妖力等とかが強いのだ。

第一、目の前の八雲紫が“個性の有無”の境界をいじつてしまえばすむ話………いや、前提を変えると………）

「考え込んでいるところ悪いけれど、多分貴女が思うような事ではないわ。」

「!？」

「もしかして、私が境界を操つて時の流れを変化させ、境界を作つたと思つてたりした？」

さすがに読まれていたか。この返答からして違うということだろうか？

「それは違う、とだけ言っておくわ。何で私がそんな面倒くさいことを作る時にしな

「ければならないのよ。」

「それもそうね。」

紫は扇子を閉じて話始めた。

「ここ、つまり今貴女が住んでいる世界と私達が住んでいる世界は完全に別の世界ではないの。」

「完全に別ではない？」

「私達の『程度の能力』が『個性』として変化していった。」

そして、『妖怪』という存在がなくなつてしまつて『個性』という形で神秘が発現したいわば私達のもう一つの現実、パラレルワールド平行世界線。それがこの世界。

そのとき、分裂した世界内の時間の速さに違いが出て今のような形になつたわ。」

「なるほど。」

私は辻褄が合わなかつたところを知り、納得した。

「で、ここから本題。」

今それについての犯人を探しているの。」

へえー。この騒動の犯人を、ね。

ん？まてよ、

「——なぜそれをわざわざ私に言うのかしら？」

賢者は含み笑いを浮かべる。

・・・・・・・・まさか

「・・・・・・・・私に協力しろと？」

そうすると、こいつは嬉しそうに、

「ええそうよ。話が早くて助かるわ。今の状況的に適任は貴女しかいなかったら断られたらどうしようかと思っていたの。

面倒くさいことになったから私はあまり動けないのよ。

それに、

幻想郷は来るもの拒まず、去るもの追わずだけど、無理矢理連れていかれたのなら話は別、よ。

ま、貴女も頑張りなさい。」

目の前の賢者はニツコリと笑った。

「え？」

「あ、安心して。協力者もつけるから。

じゃ、私もできるだけ協力するからがんばってね〜！」

そう言って、逃げようとする。

「あつ、ちよつちよつと!・・・」

「あと、これ渡すわ。何かあつたらそれに魔力を籠めて!そしたら私に連絡できるわ。」

ヒヨイ

そう言つて紫はスキマの奥へと消えた。逃げた。

「……………これから忙しくなりそうだ。」

(はあー。)

私は今日で何回目か分からない溜め息をついた。

「……………それにしても、何で今までこんなことを思い出せなかったのかしら?」

何者かによる意思の誘導?

(……………うん。いや、私の考えすぎ、か。)

頭を振って、私はさつき投げられた陰陽玉を拾い、これからについてを思考しながら自分の部屋の扉を開けた。

T o b e c o n t i n u e d

（ 中学第一学年一学期中間試験 ）

SIDE：パチュリー・ノーレッジ

今、私は中学校の教室にいる。

時々思うのだけれど、私に中学校の勉強は必要なのかしら？

必要なのは歴史云々ぐらいね。数学や理科等の系統は私にとつて得意分野だし、国語系統は本を読んでいると自然と身に付くから必要ない。

英語に関しては元は母国語だし、本を読む上で何カ国語かは覚えていないといけないから猛勉強して覚えたわ。

体育は時々来る紫と弾幕ごっこをしているお陰で瞬発力とかは鍛えられたのよね。筋肉は別で、他より少ししっかりしてるだけって感じね。

私の個性の『魔法』って便利な能力だと思われているけど、実際は知識が無いと制御すらできないし、能力を無駄なく使おうと思ったら魔力も必要なのよね。

便利な能力は苦勞をもって初めて扱うことができる。

それを分かっていない連中が多いのよねー。

まあ、それはさておき。

転生してからももう十三年近くの月日が経った。

本当、これまで色々なことがあつたわねえー。

振り返つてみると・・・色々ありすぎて思い出せない。

まあ、印象に残つたものといえば・・・

五歳・勝己から出久を守った

六歳・デパート強盗の撃退

最近だと女子生徒の中の何人かに何故か知らないけど色々と言われたりしているわね。

殆どが見下すような発言とか。

理由を探ると「授業を聞いていない変な子」とかいういかにも馬鹿にしているような噂が原因だった。

小学校のころから一緒にいる生徒はそれを苦笑いしながら見ている。

ま、それが一番正しいわね。

時々目の前で馬鹿にしてくるやつらは相手にせず読書が続けているけど、もういつそのこと、防音魔法を発動させようかしら？

「ノーレッジさん。」

「—————ほら、また来た。」

数や足音からして五、六人ぐらいだろうか。

チラッと見ると、私の横に一人、そしてその後ろに数名がいる。

私はため息をつき、本にしおりを挟んで閉じる。

そして、

「何か用かしら？」

表情を一切変えずに横を向いてそう言う。

正直面倒くさいから早くあっちへ行つてくれという意味合いも込めて。

相手はよく女子をまとめているリーダー格の・・・

名前は忘れた。

まあいい。

そうすると、あつちは生意気だと言いたい様に顔をしかめたあと三日月型の笑みを浮かべ、

「あなた、授業をあまり聞いていないんでしょう？」

と、言った。

見るからに見下している。

どうでもいい。私はそんなことに時間を使うよりも、勉強をしている方が相手にとっても合理的だと思っただけ。

「なぜそう思うのかしら？」

「皆そう言ってるわよ？あなたは教科書を開きもしていないって。

ね？みんな？」

その威圧に周りの女子生徒が少し怯み、頷く。

だが私にとってそんな庄、虫に刺されたようなものだ。

私が今まで相手取ってきた妖怪とかは、これよりも尋常じゃないぐらいの威圧感がある。

それに比べればこんなの大したことない。

「ね？皆そう言ってるでしょう？」

だから私、あなたが何で授業を聞いていないのか不思議で不思議で．．．．．ねえ、もしかして、あなたは授業に着いていけないところを見られたくないからそんな分厚い本を読んでいるのかしら？

あつ、ごめんなさい。これはあくまで私の考えだから。」

露骨に煽ってくるわね。勝己とかは釣られそう．．．．．

いや、釣ったとしてもポコられそうね。

ま、それ以前に相手にしないでしょうけど。

さて、この子、色々と勘違いしてるわね。

「それは違うわ。」

それを私は否定する。

「へえー。何が違うっていうのかしら？」

「私が教科書を開かないのは、授業内容とその応用についてを全て理解しているからよ。」

「え？ふふつ。そんな丸分かりの嘘なんでつくのかしら？」

—————正直に答えなさい。」

笑みを消してそう告げられる。

「正直も何もこれが本当よ。」

これについては本当だ。そんなことヴワル大魔法図書館に行かなくても分かる。

私は100年以上生きた魔女だからこれくらいは……ね？

「……………」それが本当なら、勝負をしましょう。」

「勝負？」

あ、面倒くさい予感がする……

「今度の中間試験、私の点数の合計より高かったらあなたの勝ち。低かったら私の勝ち。

……どうかしら？」

やっぱりね。

……正直断りたいけど、後が面倒くさそうね。

相手は既に勝ち誇った様な顔をしていて私はイラつときた。

よし。

「……………分かったわ」

「あらそう。中間試験の後を楽しみにしているわ♪」

含み笑いをしたあと、そいつは去っていった。

さて、帰りますか。

「あつあの、パチエちゃん！」

「あら？どうしたのかしら出久？」

そわそわした様子で話しかけてくる。

「……………何かあつたのかしら？」

「さっきの話……………大丈夫？」

ああ、どうやら心配しているようね。

また出久のいつもの心配性つてところかしら？

ま、今回の勝負は勝ちにいくからいいけど

「ええ、大丈夫よ。」

私は笑顔で答えた。

「よかったあ……………」

顔が引きつっていた気がするけど、気のせいね。

私はそれを聞いたあと、直ぐに支度をして下校した。

三人称SIDE

教室には出久が一人取り残されていた。

「大丈夫、かなあー？パチエさん。

．．．．．本気でやり過ぎないといいけど。」

どうやら、彼女が思っていることは別の心配をしていたらしい。

く 中間試験当日く

(ふむ．．．．．簡単すぎるわね。

あら？ここ問題文が間違っているわね。ここに訂正の文章を書いておきましょう。)

サラサラサラ

(ふむふむ．．．．．ま、これでいいでしょ。) サラサラサラ

—————この差である。

く 中間試験後く

「はい、今からテストを返すぞー。」

他に見せるのはいいが、騒ぐのは席に座ってからな。」

「あー!?嘘だあー!?」机ドーン!

「……………死んだ。」?チーン／

「相棒おおおー!?」

「返事が無い。只の屍のようだ。」

「……………フン。まあ、上々だな。」

「よし!」グツ

「まあ、こんなところかしらねー?」

色々な声が聞こえる。

ちなみにこれが最後のテスト、英語だ。

私は予想通りの点数だった。

「ノーレッジさん！」

あ、忘れてた。というかデジャブね。

勝負を持ちかけてきたこいつは今私の後ろの席にいる。

だから私は後ろを向いた。

「テストの合計、何点でした？」

私は国語80点、数学92点、社会85点、理科97点、英語86点で合計440点。

あなたは？」

ニタアーつと笑っている。

へえー。まあ、中学一年生のテストにしては上々の点数ね。

その証拠に、周りから驚愕の声が上がっている。

この子、性格はアレだけど結構な努力家だったようね。

それはさておき、

「見た方が早いわよ。」

と、私は答案用紙を見せた。

「ありがとう ペラツペラツ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ は？

ペラツペラ

え、

えっええええええええええええええええ!!?

「どうした!」

「!? う、ううん。何でもない。」

？何をそんなに驚いているのかしら？

“たか が” 五百点満点なのに。

「?どうかしたかしら?」

「も、申し訳ございませんでしたあああああ!」

彼女は凄いい勢いで謝ってくる。

何故謝っているのかしら?全く分からないわね?

出久↓(やっぱりやり過ぎてるー!?!?)

勝己↓(・・・チツ!いつか越えてやる!)

?何がなんだか分からないわね。

まあいいわ。

そのあと、いろいろと問い詰められたりしたが、点数を察していそうなのは多分二人だけで、それ以外は誰も知らないだろう。

こうして私の日常は続く。

To be continued...

進路とオールマイト

SIDE：緑谷出久

中学三年生。

この時期の選択で人生が殆ど決まってしまうと言っても過言ではない。

高校入学を控えた大事な一年間。

希望するその進路はもう、決めている。

「えー。お前らも三年ということで、本格的に将来を考えていく時期だ。」

先生がそう言って進路希望のプリントを取り出す。

その中、僕は今朝の事件についてをノートにまとめていた。

“将来のためのヒーローノート”

ヒーローになる上で重要なことの一つ。それは、相手の個性の長所や短所を短時間で見極めることだ。

ヒーロー達はこれによって自分達の個性をどう使ったら良いかを判断する。

僕は無個性のため、戦闘時の行動の幅は狭くなる。

だから尚更こうやって分析能力を身に付け、判断していく必要がある。

まあ、僕自身がヒーローオタクであることもこのノートをつけている理由の一つなのだが。

「今から進路希望のプリントを配るが、みんな

大体ヒーロー志望だよねえー！」

「「イエーイ！」」

教室全体が歓声と共に個性を発動させる。

手の指を伸ばしたり、手を岩にしたりとみんながみんな違う個性を持っている。

だが、中には個性を使わずに傍観、あるいは無視している人もいる。

ふと辺りを見渡すと、かつちゃんはいつものように机に足をかけ、パチエちゃんに關しては本に何かを書き入れたりしてまるで周りから音が聞こえていない様にも見える。

こんな馬鹿騒ぎにはまるで興味が無いというようにいつも通りでいる二人。
これが僕の幼馴染みだ。

(……………そういえば二人はどの高校を受験するのだろうか。)

騒ぎの中、頭の中にふとそんな疑問が現れた。

まあ、かつちゃんは将来の夢とか今までの言動からして英雄のヒーロー科で間違い無いだろう。

パチエちゃんはどうするのだろうか？

パチエちゃんは高校についての話や噂を耳にしたことがない。

何年も一緒だったが、それに関しての話題を振られたりしたことは今までに一度もないと言ってもいいだろう。

彼女はどこを受験するのだろう。

(……………出来れば雄英であってほしいな。)

自分の背中を押してくれた友人がそうであってほしいというほんの少しの願望を抱きながら、僕はまた周囲に耳を傾ける。

「先生。」

かっちゃんが突然声をあげる。

伸びきった声はその余裕を表していた。

「皆とか一色他にすんな。」

俺はこんな没個性とかのモブ共と仲良く底辺なんざに行かねえよ。」

そう言つて口元に笑みを浮かべながら言い放つ。

「そりやねえよ勝己!!」

「そうだ!」

辺りから来るブーイングをかつちゃんは鼻で笑った。

それでまたブーイングは強くなった。

かつちゃんの個性は『爆破』。

掌の汗線からニトログリセリンを発生させ自由に起爆させられる。

攻撃力が高く、応用の利くヒーローに向いた「良個性」だ。

「えーっと、爆豪は確か……………」

「英雄志望だったか。」

それを聞いて教室内にはどよめきがはしった。

「え、英雄!?あの国立の!……………」

「やべえよ、あそこ確か今年偏差値79だぞ……………」

かつちゃんがあの英雄へ志望すると知り、さっきまでのブーイングはもはや影も形も無い。

中には、かつちゃんを尊敬、或いは恐怖の眼差しで見つめている者もいる。

「このざわざわ感がモブたる由縁だな。」

そう言つて机にバネのように跳ね、飛び乗る。

「模試じゃA判定。」

俺はウチで今回雄英を受ける数少ない人間の一人。

そして、

俺はオールマイトをも超え、トップヒーローとなり、

高額納税者ランキングに名を刻むのだ！」

目標が明確であり高く、それを自信満々に宣言することできるはその性格故だろう。

「そういえばノーレツジ……」

その名前が出たところできさか……という声が何処からともなく聞こえてくる。

(……………もしかして……！)

僕はそう微かな喜びを抱いた。

「あと・・・緑谷も英雄だったな。」

先生の口から僕の名前が出た途端、教室内に短い沈黙が訪れた後、爆笑に包まれる。

「無理無理！」

「勝己やノーレツジはともかく、お前は無理だろ！」

「しかも無個性は英雄に入れねえよ！」

「つ！英雄は無個性でも受験可能だよ！ただ前例が無いだけで！」

だからやってみないと分からないじゃないか！」

僕はそれを受け止めきれず、反論する。

確かにヒーローは主に戦闘や救助をするための“個性”が必要だ。

だが、無個性にもそれはできるはず——————

「なあ、勝己もそう思うだろ？」

その言葉を聞いて僕は微かに肩をビクツと震わせた。

自分が恐怖していることが嫌でも分かる。

そんな風に僕がしているとき、かつちゃんは口を開いた。

「——————受ける受けないもそいつの勝手だろ。だから俺は言っただろ、『数少ない人間の一人』とな。」

「——————それは、意外な言葉だった。」

いつもだったら「おいコラデクウ！」とか言ってくるのに……

かつちゃんは続ける

「そいつ今までのテスト結果から見て筆記は通るだろ。実技は知らんが。」
それは、僕を認めた言葉の様に感じた。

「勘違いすんじゃないぞ、デク。

俺はお前をほんの少し認めた訳であって対等にした訳じゃない。

ただお前が後ろを歩くのを許しただけだ。」

こちらを少し睨みながらそういう放つ。

彼はそのまま席に座った。

そのまま何事も無かったのようにHRが終わった。

S I D E : バチユリー・ノーレッジ

私は今、徒歩で帰っている。

そして、今回は何を研究しようかを考える。

(ふむ、今回はスペルカードの製作にうつりましょう。雄英は実技試験もあるそうだし、

他に当たつても被害を押しえられるようにしないと・・・（ドゴーン！

（・・・あら？）

突然、どこか近くから足音の様なものがした。

「私が来た！」

そのとき、幼少期に聞いた正義の象徴の音が響いた。

私は何かあったのかと。声がした方角に向かって興味本意で歩を進める。

「——————と、慣れない土地でうかれちゃったのかなあ——！」

そこには、オールマイトと座り込んでいる出久がいた。

・・・なんなのこの光景。

「おや？ ああ！ ノーレッジ少女じゃないか！ 久しぶりだな！」

オールマイトがこちらを見ていつもの暑苦しい雰囲気を放ちながら言う。
絶対あの周り温度高いわよね。

「ええ。」

それとこの状況は一体どうしたの？」

く説明中く

「……なるほど。」

つまり、そのヘッドロヴィランに襲われていた出久を救出し、目を覚まさせた後現在に至るということね。」

私はペットボトルの中に入ったヴィランを指差しながら言う。

「そうさ！」

「……おーっと！ そろそろ時間のようだ。私はそろそろこのヴィランを警察に届けに行くよ！」

じゃあな、少年少女！ 液晶越しにまた会おう！」

「えーもう!?!」

オールマイトが行こうとするとところを出久が引き留めようとする。

「プロは常に敵か時間との戦いさ！」

それじゃ・・・今後とも・・・

応援、宜しくねえええええ！」

オールライトがジャンプとは思えない脚力で飛んでいく。

・・・さて、

「出久、かえ・・・る」

振り返ってみたが、そこに出久は居なかった。

まさかと思い、さつきオールライトが飛んでいった方向を見る。

「つてコラコラコラコラコラ！離しなさああああい！」ガシイ！

「今離したら死んじゃうううう！」 バタバタ

「いや、それもそうか。」 スツ

飛んでいるオールナイトとそれにしがみついている出久を見つけた。

はあ・・・どうやらまた一混乱ありそうね。

溜め息をつきながら私は飛んでいった方向へと向かった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

へドロ事件

SIDE：パチュリー・ノーレッジ

ハロー。パチュリーよ。

今私は飛んでいった二人を走って追いかけて来ているわ。

「ん？」

あら？どうやら屋上に留まった様ね。

オールマイトには魔法で姿を隠しても気配でバレてしまう。

うーん、どうしようかしら。

あ、私がこの姿で行く必要無いわね。

それならあの方法で……

「それっ」

私はそう言って魔法を使う。

徐々に周りの景色が大きくなっていき……否、私の背が小さくなっていき……

「ピヨッピヨッピ (よし、成功ね♪)」

最終的に殆どの全身が茶色の羽毛に覆われ、元々手であった場所には翼が生え、小柄な鳥……スズメになった。

この魔法の欠点は一部以外、戻る以外の魔法が魔法具を使わないと出来ないことね。あと、動物に詳しい人にはバレてしまう。

そしてそれが最初に来るようになった動物以外の制限時間、鳥類の場合は十三分。しかもステータスが元にした動物そのものになってしまつて弱体化してしまうことがある。

相性やら何やらがあつて使い勝手が悪いことこの上無い。

まあでも、

「ピーピルルツピュールルツ (盗聴なら持つてこいだわっ!)」 シュバツ!

私はビルの屋上めがけて飛翔する。

スズメは日本の大体の地方に多く生息してるから、いたとしてもバレないでしょう。

「……………無個性の人間でも、貴方みたいなヒーローになれますか!?!」

少し昇って行くと屋上が見えてきた。

耳に入ってくるのは力強い出久の叫び。

「個性が――――」

不意に言葉が切れ、瞬間、

辺りに蒸気の様なものが出てきた。

「ピピッピリユールルル!?(ちよっ何よこれ!?)」

私は蒸気によって羽が重くなっていくのを感じ、慌てて落ちるのを回避するために直ぐにそこから脱出、上昇した。

もやが晴れた後、屋上にあつた光景は……………

ガリガリになったどこかオールマイトに似た人物と、

「うわあああああああ!?!」

そこで叫ぶ出久だった。

……………なんだこれ。

私は鳥の状態で死んだ目になった。

S I D E O U T

S I D E : 爆豪勝己

「なあ勝己。」

「ンあ?」

俺は商店街近くの路地裏を取り巻き共と歩いている。

こいつらは俺に従って来たり、カツアゲに誘って来るが、俺はそんな事に興味はない。

「……………」というか、雄英に入るためにも今内申を下げるのはマズい。

「なんで今日緑谷にあんなこと言ったんだ?」

「ああ、それか。」

そう言いながら俺は落ちていたペットボトルを蹴飛ばす。

腐った緑色をしたそれはキャップが取れたことで中身が溢れる。

「……………」この時もっと早く気づいていたら、中身を注視していたら。

「強くなれば強くなる程、あのクソナードのぶつ潰し甲斐があるだろ?」

「おお、ははっ流石だな。」

まあ、これは半分嘘だ。

本当の理由は、アイツもいつか壁となりそうな相手だからだ。

立ちはだかる壁が多けりや多い程、俺は強くなる。

トツプヒーローに近づける。

“あの時”の挫折は屈辱ではあったが、同時に俺を強くする糧となった。

バコオン！

持っていた缶を個性で爆発する。

“同年代の目標となる壁”

それは幼い俺にとって大きな学びだった。ムカツクがな。

不本意であってもそれがあって俺が居る。ヒーローになる為には、オールマイトをも超えるには、

—————アイツを、あの時唯一俺に勝ちやがったアイツを超えなきやなんねえ。

俺は自分にそう言い聞かせる。

「かつ勝己……」

思案している途中にそいつが指をさした。

それは俺の真後ろに……

「いい個性の、隠れミノオ！」

「しまっ……」

そう言う暇もなく、俺はヘドロに包まれた。

S I D E O U T

S I D E : 緑谷出久

僕は一人ヒーローノートを見ながら爆発があつた現場に向かつてる。先程のオールマイトの言葉がずっと胸に刺さっている。

『相応の現実を見なければならぬ。』

分かっているんだ。分かっていたんだ。もう、とつくの昔から。

でも、

『Plus Ultra よ。頑張んなさい。』

もしここで諦めてしまったら、あの時“彼女に背中を押されて此処まで進んできた歩を止めてしまったら、

『出久……ごめんね……ごめんね……!』

また昔に逆戻りだ。それは嫌だツ……!

僕は、どうすれば……

色々な思いが交差する。

そして僕はふと周囲の音に耳を傾ける。

……そういえば、今日はやけにスズメが周りにいることが多いな。

まあ、単にそういう時期なのだろう。

僕はふらりと事件現場に向かう。

……そのスズメの目の色に気付かないまま。

現場に向かうと、周囲の野次馬からざわざわとした声が聞こえる。

どうやらまだ続いているようだ。

「おい、あのヴィランに捕まってるの中学生か？」ざわざわ

「可哀想に……」ざわざわ

中、学生……？

僕と同年代かそれに近い子が捕まっているのだろう。

しかも爆発が起こってから少し時間が経っている。ここまで持ちこたえているのは個性の影響か、余程のタフネスがあるからだろう。

僕はその現場を観察してみる。

「……………ツガハア！」

「ハハッこの個性は当たりだな！ハハハハハッ

これなら、アイツを……！」

あれは、かつ……ちゃん？

ヘドロらしきヴィランにかつちゃんが捕まっていた。

「おい！あれってさつきオールマイトが捕まえてたヴィランじゃね？」ざわざわ

「え、嘘オールマイト!?来てるの？」ざわざわ

「だったら何やってんだよオールマイト！」ざわざわ

嘘、だろ？

さつきオールマイトが捕まえてたヴィラン？そんなの決まってるじゃないか。

僕がしがみついたから落としたんだ。

僕のせいだ……！

かつちゃんがあんな目に遭うのも、オールマイトが悪く言われるのも、全部、全部。

そのとき、かつちゃんと目があった。

その三角眼は、その表情は、苦しそうに……

—————ダツ！

それを見た瞬間、僕は反射的に走り出した。

なぜこの時走り出したかは、分からない。

気がついたときには、足が動いていた。

「おい！自殺志望者か!？」

「戻れっ！」

周りの制止も聞かずに僕はただ走る。

何があだか分からないまま。

ヘドロヴィランの元に着くと、そこにはかつちゃんがいた。

「かっちゃん！」

「！デクテメエ何で!？」

「分からない！何故か考えるよりも先に、体が勝手に動いて．．．っそうだ！

ええつと、これじゃない、えーつと．．．

あつた、これだ！流動系の個性の弱点！それは．．．目だ！」

僕はバツクをヴィランの目玉めがけて投げる。

「グアアアアアアッ！」

「—————ツ!？」

ヴィランは怯む、が、かっちゃんを離さない。

ヤバツこの先考えてなかった!？」

えつと、どつどつどうし「退けやデクウ！」ツ!？」

僕はかっちゃんの声から嫌な雰囲気が出たため、直ぐにその場から距離をとった。

刹那、

「死ねやゴラアツ！」ドゴーーーーッ！

そこを中心に爆発が起こった。

僕はその爆風で吹っ飛ばされ、商店街の建物に壁を打ちつけた。

「ッ!?!」

「グエアアアアアツ!?!」

ヴィランが叫ぶ。

だが、

「何、だつと……」

ヘドロヴィランは飛び散った後また形を成した。

さつきとは違つてかつちやんは解放されているが。

この時、僕は立ち上がるうとしていて、気づけなかった。

「ッ!デク!」

「え?」

かつちやんの声で僕は目の前を見る。

「ハーツハツハー!死ねえ!」

ヘドロヴィランの攻撃が、大きな手のようなモノが、

僕の、すぐ目の前に……ツ!?

————無理だ。

この距離じゃ、もう避けきれないっ……!?

僕は反射的に目をつぶる。

……幾秒経っただろうか？ 覚悟していた痛みは感じない。あれ？

目の前には……

うつすらと、注意しなきや気づかなそうな蒼い膜。

その向こうに、僕は、平和の象徴を見た。

「情けない……!」

活動限界はとつくに過ぎているはずなのに、その姿を保つだけでも辛い筈なのに……
だけどそんな状態で笑っている……!

「君に論じておいて己が実践しないとは．．．．．！」

ヘドロヴィランの攻撃を止め、それどころか彼はそれを押し返している。

「ツガア!? 何だ、コレツ動きが．．．」

突如、ヘドロヴィランの動きが遅くなる。

何故だかは分からない。だが、誰かの個性だろうか？ それとも単に麻痺しただけ？

ヴィランを注視する．．．．．

ヴィランの下には何が金色の紋様がうつすらと浮かび上がっている。

ん？ これって．．．．．

「プロは何時だつて命懸けええええ！」

その思案も、直ぐに、その大きな声に吹っ飛ばされた。

「DETROIT SMASH!!」

平和の象徴は、今、その大きな一撃を放った。

S I D E O U T

S I D E : パチュリー・ノーレッジ

「ふふっ」

私は今、とある道を歩いている。

少し前にあつた幼馴染みの成長に微かな嬉しさを感じ、顔に微笑みを浮かべながら。

「それにしても、あの一撃はすごいわねえ……」

私は上空に目を向ける。

そこには先程まで晴れた空が広がっていたが、今はパラパラと雨が降っている。

あのオールカバカカが一撃で上昇気流を発生させ、それによつて雲が生じ、雨が降つたのだろう。

気象庁が聞いたらきつと驚くでしょうね。

ま、幻想郷に出来る輩はいそだね。地底にいる鬼とか。

「さて、と……あら？」

私は見覚えのある薄い金色の爆弾を思わせる髪を見つけ、そこから見えない場所で耳をすませる。

「おいデク。」

「!? なつなに、かつちゃん？」

出久が怯えた声を出す。

「………決して」

「え？」

「決して俺はお前に助けを求めてはいねえ。」

なのに、何で俺の所まで来た。」

ああ、勝己は彼を虐げていた。でも、何故それでも助けたのかを聞きたいのね。

ま、それは決まってるでしょう。

「君がっ……君が、捕まってたからっ……」

それを見たら、体が勝手に……

君を、お節介でも助けたかったから……！」

「……」

勝己はそれを聞いて黙る。

風の音がやけに大きく聞こえる。

「そう、か……」

助ける……お節介……、あの時の……なるほど、そういうこと

か。「ボソツ

「?かつちゃん？」

「……来いよ。雄英に」

「!?」

勝己が真剣な声色で出久に言い放つ。

「俺はトップヒーローを目指す」

あのオールマイトをも超えてやる。

テメエも憧れてんだろ？ だったら来いやクソデク。

俺は雄英に入るからよオ。」

「かつちゃん……………あの」

「言っただろ？」

「俺は後ろを歩くことを認めただけだ」

付いてくるか追っかけてくるかは勝手にしやがれ。」

勝己はそのまま帰路につこうとする。

「あっ」

助けられたなんて思わねえからな!? 恩売ったっていい気になんなくソナード! お前は昔からも今も俺より下だ!」

……………せつかく良いこと言ったのに一気に自分で壊したわね。何が言いたかったのよ、今の。

ま、勝己らしいといえづらいけど。

……………今からについては分からない、か。

さあーつて帰りま「私 came!」・・・あら?

「オールマイト!? 何でここに!? さっきまで取材陣に囲まれてたんじゃあ・・・」

「ハハハッ 抜けることなんて訳ないさ! 何故なら私はオールマイ (ゴハア!?)」

「うわあ!?!」

・・・はあーーー。

「まったく」

「!?!」

「なーに無理してんのよ。オールマイト」

予想外だったのか、私が出てきた事に二人は酷く動揺している。

「ゴフツ なんな何を言っているんだノーレ (ゴホンゴホン・・・少女よ! 私 is オール

マイトじゃない! マネージャーの八木だ! ゴフツ」

「パパパパチエちゃん! そうだよ! この人はオールマイトじゃない 「貴方達そんな慌てて

るんだから嘘ついても分かりやすいことに気づきなさい。」うぐつ・・・パチエちゃん、

この事は出来れば秘密に・・・」

「分かっているわよ。」

こんなことが世間に知られてしまったら混乱を招く上にヴィランが活発化して面倒

なことになりそうよね。

私は呆れたような目をして言う。

「有難い。ノーレッジ少女。」

「……昔から思うんだが、君はやはりどこか優しい部分がある。君の叔父にそっくりな性格だよ。」

「そう……」

「え？叔父？」

「私の叔父はプロヒーローやってるから仕事の関係で知り合いなのよ。」

「……で、こんな話をしに来た訳じゃないんでしょう？」

「ええ!?プロヒーロー!?!」

「出久ちよつと黙りなさい。」

まったく、やっぱりヒーローの事になると熱くなるのよねこのヒーローオタクは。

「そうだ。」

「……少年、私は君に礼と訂正、そして提案をしに来た。」

途端。雰囲気が真剣になる。

「君が居なければ……君の身の上を知らなければ……私は口先だけのニセ筋

になるところだった。

ありがとう。」

オールマイトは後悔があるような表情で言った。

「いついえそんな！元々僕が悪いんだし、仕事の邪魔をしてしまつて……無個性のくせに、生意気なことを言つてしまつて……」

「そうさ。」

オールマイトが弱気に謝る出久のその言葉を遮る。

「あの場所で……無個性で小心者の君だったからこそ、私は動かされたんだ。」

「え……?」

「トップヒーローは学生時代から逸話を残している。彼らは口を揃えてこう言う。『考えるよりも先に、足が動いていた。』と。」

「……!ううっ」

出久は何かを思い出した様で、泣き出しそうになっている。

「……まだ何も言わないでおきましょう。」

「君も、そうだったんだろう……?」

「……っ!ああ」

出久はその言葉を聞き、涙を堪えて膝を付く。

……そういえば、昔から出久は泣き虫だけど“あの時”みたいに困っている子を放っておけない、というかも今回みたいに本能的に助けに行っている所あったわねえ。

私はそんなヒーロー気質に感化され、“ヒーローになってみるのも良さそうね。”って思つて、それがあつて雄英目指したんだっけ。

私は少し昔を思い出しながら目の前の光景を見る。

「君は、ヒーローになれる。」

それを聞いたとき、出久は泣き崩れた。

S I D E O U T

S I D E : 緑谷出久

「君は、ヒーローになれる。」

それを聞いたとき、僕は泣き崩れた。

ここまで進んでこれたのは、

『何で個性が無いだけで諦めているの。そこで諦めるからなれないんじゃない。』

ヒーローに必要なのは、人を救おうと思う心と、

それを実行しようとする努力よ。』

『Plus Ultra』よ。

頑張んなさい。』

やはり、この言葉があつたからだろう。

“あの時”が、僕の背中を押した。

SIDE：爆豪勝己

『お節介でも助けたかった。』

アイツはいつもそんな感じだったのか。

ハハツやつと謎が解けやがった。

今回の事は俺の無様な姿として噂になるだろう。

だが、

『“きれい” じようはつぼぐがゆる” ぎない” ぞつ！』

“あの時”の謎が解けた。

俺の目標を創った、挫折を味わった“あの時”の。

だから、

俺は勝つて守るもん守つてトップヒーローになつてやる。

そして、アイツを超える。

S I D E : パチユリー・ノーレッジ

“あの時”、私はヒーローになってみようと思った。
幻想郷に戻るまでの間、ヒーローをするのも、案外いいかもしれないわね。

T o b e c o n t i n u e d . . .

雄英高校ヒーロー科ノ筆記&実技試験ノ

一試験当日一

一—————国立雄英高校

ヒーロー育成の最高峰である超名門校。

受験できるだけでも素晴らしいとされ、生半可な者が通れるほど広い門ではない。

特に今年の競争倍率は300倍。

それを通ることが出来るのはたった一握りの者のみ。

—————緊張しながら、或いは真剣な表情で各々が試験を受けに来る中、
一人気だるげそうに欠伸をする少女がいた。

SIDE:パチュリー・ノーレッジ

うーん……つと。

はあ……流石に人数が多いわね。

そう思いながら私はふと上を見上げる。

「……………青い空を背景にして視界に入るのは大きなアルファベットの『U
とA』。」

これが雄英高校の校門、そしてその後ろにあるH型の建物が校舎だ。

規模がデカイだけあって校舎もデカイ。見た限り敷地も広い。そしてセキュリティも万全。

流石「最高峰」と言われるだけはあるわね。

「……………さて、と。」

私は筆記試験の会場へと向かった。

（はあ……簡単過ぎて時間が余ったわね……）

どの教科も百と数年間生きてきた私にとっては朝飯前だった。

最高峰と聞いて少し期待したけど、所詮は高校の受験。

中学生レベルの問題と応用が殆どだった。

仕方がないので実技試験に使えるようなスピード、魔力重視の魔法を思い浮かべる。

その後、あつという間に筆記試験は終わった。

「……………」少女の筆記の点数に採点する何名かが驚き、とある教師が頭を抱えたのは言うまでもない。

私は実技試験はまず説明がある為、その会場に移動する。

「少女移動中」

説明会場の講堂はどこか映画館のような造りで薄暗く、中央にあるステージらしき部分はスクリーン等がある。多分説明する教師が来る場所なのだろう。

私はそれを横目に指定された席へと移動する。

「あ、パチエちゃん！」

席に座った直後、右方向から聞き覚えのある声がある。

横を向くと、緑髪で縮れ毛、こちらを向いてにこにこ笑っている出久。その隣にクリム色に近い金髪で爆発を思わせる髪型、横目でこちらを見たあと目をそらした勝己がいた。

「あら、出久、それに勝己も。」

「見たらなかったから休んだのかと思ったよー！」

「ケツ」

出久は心配そうな表情をした後、嬉しそうにそう言う。その後ろの勝己はいつも通りの対応に見えるが、その表情は何時にも増して冷静だった。

その直後、スポットライトが点灯し、その光は説明するであろう人物に向けられる。その人物は――

「リスナー達！今日は俺のライブへようこそー！エヴィバデイセイハイー！
しーん。

テンションの高いかけ声に帰ってきたのは冷たい空気と静寂だった。

そりゃあ、これから始まるのは大事な試験。

たとえ緊張した暗い雰囲気の中で呼びかけたのがあのポイスヒーロー……プレゼント・マイクとしてもテンションの差に着いていけないから誰も答えられないでしょう。

……まあ、出久は返したそうにしているけど。

「こいつはシヴィー……！」

そしてそれだけで済ませ、尚且つテンションを下げず何事もなかったかのように振舞うのは流石プロ、かどろかは知らないけどすごいと思う。

本当どんなメンタルしてるのよ山田さんあの人。

「なら、リスナーの皆に実技試験の内容をサクッとプレゼンするぜ！ア－ユーレディー？

イエーイー！」

シーン。

またしても静寂。

今回はそれを分かって自分で自分のかけ声に答えている。

うん、やっぱりどんなに静かでもこの人は常時通常運転ね。

声が大きいから煩すぎてかなわないわ。

そしてツツコミが居ないから尚更煩い。

まあ、あの人説明するにしても雰囲気重くなって実技試験を受けるのをやめる人が増えそうだからどっちにしろ向いていないけど。

とある廊下で

「へっくしゅん！」

「大丈夫か相澤君！風邪かい!？」

「いえ、大丈夫です。あと暑苦しいのでその勢い止めてください。（何だったんだあのくしゃみ……）」スツ……

「君結構酷いな!？」

と、いうことがあつたそう。

くそして話のスポットライトは少女へと戻る。

ん？今何かあつたかしら？

……まあいいわ。

「ボイスヒーロープレゼント・マイクだー!!すごい!ラジオ毎週聞してるよ、感激だなー!!雄英の講師はみんなプロのヒーローなんだ!!」

突然どうしたかと思つて横を向くと、キラキラとした表情で興奮しながら出久がそう言つていた。

「うるせえ」

「うるさいわよ。」

「ごめん!つい……」

はあ……まったく。

興奮したらすぐ話し出す癖を直してほしいわね。

私みたいに話に集中している人も居るのに騒ぐだなんて。

空気を読みなさい、空気を。

「リスナーはこの後、10分間の模擬市街地演習を行ってもらうぜ!!持ち込みは自由!プレゼンの後は、各自指定の演習会場へ行ってくれよな!………オーケー?」

「………つまり、同校^{ダチ}同士で協力させねえって訳か。」

勝己がおもむろに取り出したカードに書いてある演習の指定場所を見てそう呟く。

そこには・演習場所A・と書かれていた。

………写真に写った顔の向きが正面ではなかったことに突っ込んだら負けね。

「あつ、連番だけと場所が違う!」

「………本当ね。」

確かに私達三人は連番だったが、出久は・演習場所B・、私のは・演習場所C・と書かれていた。

同校同士だと私情が入ってしまう、私達のような年代における大半は特にその傾向が強い。

そのような私的感情をヒーロー科の入試に持ち込むような不合理極まりないことを避けたい。

だから別々に分けたのでしょうね。

「演習場には、仮想ヴィランを3種 多数配置してあり、それぞれの攻略難易度に応じてポイントをもうけている。各々の個性で仮想ヴィランを行動不能にし、ポイントを稼ぐのがリスナーの目的だ！もちろん、他人への妨害などアンチヒーローな行為はご法度だぜー？」

と、なると・・・

使える魔法の条件は・・・

・操作性が高い

・交差点以外の場所で使える範囲が狭いもの

・高火力

・結界の場合は守備能力が高いもの

となるわね。

ま、私の場合は空を飛べるから上からの奇襲がメインとなりそうだからこの考えは意味無いと思うけど。

あ、あのお札をサブウェポンとして使うのもアリね！

それと、〃三種〃？

このプリントには〃四種〃．．．．．

うん？〃ポイント〃？〃演習場に多数配置〃？

つてことはつまり．．．．．

「質問よろしいでしょうか!？」

薄闇の中、大きな声と立ち上がったような音が響く。

「オーケー!」

と、ハイテンションでマイクさんが指を指したと同時にスポットライトが声の主に向けられる。

その先には、いかにも真面目だということが伝わってくるメガネをかけた少年が居た。

「プリントには、〃4種のヴィラン〃と記載されています。誤載であれば、日本最高峰たる英雄にて恥ずべき失態．．．！我々受験生は規範たるヒーローのご指導を求め、この場に座しているのです!」

ハキハキと大きな声で厳しい意見を言う少年。その背筋は真っ直ぐと伸びている。

うわ、見た目通りすごく真面目ね。しかも生真面目すぎてちよつと厳しい。

まあでも、プリントであろうと何名かの教師は目を通していろいろし、あの人みた

いに分析能力が高い人がいるから誤載はまず無いでしょう。

「それとその緑髪でモジャモジャの君!」

「はっ、はい!」

「先程からボソボソとうるさい!ここは最高峰と称される雄英だぞ!物見遊山のつもりなら即刻此処から立ち去りたまえ!」

「す、すすすいません!」

あーらら。やつぱりこういう感じだったようね。

素直故にルールやら規律やらで無意識に縛ってしまっている。

やつぱりここに集まってきている時点で全員一癖も二癖もありそうね。

「……………」ここに自分を含んでいないのはこの少女がそれを理解してないからである。

うーん、最近よくわからないことが起こっている様な気がするけど分からないわね……………?

「オーケイ、オーケイ!受験番号7111、ナイスなお便りサンキュー!」

マイクさんは宥めるように言った後、ラジオの様なノリで勢いよくサムズアップをした。

おお、こういう事があるからこの人にしたのね。

「4種目のヴィランは0ポイント！こいつは言わばお邪魔虫。各会場に一体、所狭しと大暴れしてるギミックだ！倒せない事もないが、倒しても大した意味は無い！リスナーには、上手く避ける事をおすすめするぜ！」

「なるほど、ありがとうございました！」

90。の綺麗なお辞儀をした後、彼は席についた。

0ポイント……お邪魔虫……そして個性の相性……。

大した意味は無いと言っているけど本当にそうかしら？

ここに来ている受験生は全員“ヒーロー志望”。

中には個性が攻撃に向いていない人も居るでしょう。

と、いうことは……。

救済処置として何か設けられている筈よね？

ヒーローに必要なのは攻撃力よりも寧ろ……。

「最後に！リスナー諸君に我が校の校訓をプレゼントしよう！」

かの英雄、ナポレオン・ボナパルトはこう言った！『真の英雄とは人生の不幸を乗り

越えて行く者』と。

更に向こうへ『Plus ultra』!!

……それではみんな良い受験を！」

さて、と。

準備をしていきましようか。

く少女準備中……く

私は今、バスで移動した先にある会場に居て、スタートの合図を待つ。

さて、ここの校風は自由。

それは教師にも共通して言えることである。

だから………

「ハイ、スタート!」

………こんな感じに突拍子もないスタートコールで受験者の意表を突いてきても可笑しくはない。

私は合図と同時に空へと舞い上がり、索敵して弾幕を展開しながら飛び回る。

「オラオラどうしたあもう賽の目は投げられているぞお!?!実践にカウントダウンなんて存在しないからなあ!つて一人反応して飛んでいつてるじゃねえか!?!」

煩い。

受験生が一斉に飛び出したころ私は次々に敵を行動不能にしていた。

「木符『シルファイーホルン』ッ!」

空中でスペルカードを取り出し、私はスペルカード宣言をする。

すると、私の持っているカードが光を放って霧散する。

その光が集まってパラパラと捲れていく本の中にある魔法陣に吸い込まれる。

その光は魔法陣を起動させ、また魔法陣は白い輝きを放つ。

刹那—————

「標的確認・ブツ殺 (ドガン)」

周囲の仮想敵に緑色の弾幕が襲いかかる。

認識したものの、そうでないものをまとめて行動不能にしていく。

次のスペルカードを使うにはすこしインターバルがあるため、私は地面に降り、通常魔法で周囲に飛ばした本の魔法陣を起動させ一つ一つ背後から確実に敵を倒し、周囲の人間の手助けをしながら飛び回る。

「っああー!」ドサッ

「!?!」

突然悲鳴と転ぶ音が付近で聞こえたため、私はそこへと飛んでいく。

そこには、瓦礫に足を挟んで動けない女子と、今にも襲いかかりさうな仮想敵が二体居た。

おお、これは酷い。

一人に対して二体って……

はあ。少し面倒臭いわね。

そう思いながら私は2つの本のページを切り替える。

一つは……

「ブツ殺（）サア……ガン！」

動きを封じる鎖を出すお札だ。

「月符『サイレントセレナ』ッ！」

私はスペルカード宣言をする。

今度はスペルカードが光って消え、私の目の前には大きな、上下左右には小さな魔法陣を展開させる。

刹那—————

「……綺麗。」

——上下左右からは青くまるで流れ星のように素早く儂い光を放つ弾幕が発射され、大きな魔法陣からは水色に近い白の弾幕が出現し、大きく螺旋を描きながら敵へと向かっていく。

魔法陣が純白に輝いているため、その幻想さと優美さが増していく。

ドゴオ！

だが、それはその儂さとは裏腹に、その弾幕は殺傷性を兼ねていた。

スペルカードは美しいし、相手もそれをブーツと見て油断するから結構大事なのよね。

さて、起動させた本のもう一つは……

「うわあああああ!?!……あれ?」

よし♪ちやんと防御の魔法陣を起動させているみたいね。

少女に飛んでいった爆発四散した仮想敵の破片は、魔法陣から展開された結界によって防がれた。

私は瓦礫を消失させ、少女の手当てを行う。

手に発生した緑色の魔法陣は光を放ち、少女の足を照らす。

「もう大丈夫かしら?」

「!.....うん、ありがとう。」

「そう。」ドゴーン!

「.....うん?」

突如、唸るような地鳴りが響く。

何事かと思つてその方角を見ると.....

ビルよりも大きく、周囲を破壊し、轟音を発生させながら進む仮想敵が居た。

.....大がかりねえ。

その巨体と破壊性、恐ろしさに怖じ気づいて逃げ出す者、腰が抜けて逃げられない者等、パニックが起きて混沌と化している。

これじゃあ周囲に被害が及んでしまう。

倒しても意味がない。なら、倒してもいいわよね?

「ね、ねえ、逃げよう?」

「いえ、私はあれを倒すわ。」

「はあ!？」

少女は酷く驚く。

だが私は続ける。

「あなたは逃げ遅れた人の救助をお願いします。」

「いいけど、何で挑むの!？死ぬよ!？」

「見て見ぬふりして被害を拡大させる方がもつと酷いわ。何のためにヒーローが居るのよ。」

ヒーローはヴィランを倒し、人を助けるために居るんでしょう?」

「————!？」

「だから救助をお願いします。大丈夫。これが付いているから。」

そう言って私は小さな金髪の人形を取り出す。

「?これって?」

「弾幕を発生させる人形よ。」

降ってくる瓦礫とかを破壊してくれるわ。」

「……………わかった。」

若干の諦めを見せながら彼女は走り去っていった。

・・・さて、私も行かなきゃ。

あんなこと言っただけどそれはあくまでほんの一部。

最も大きな理由は他にある。

それは・・・

「……………悪いけど静かにしてもらえないかしら？」

あなたがいると悲鳴やら何やらでうるさいの。」

うるさくてさつきからイライラしていたからだ。

私はこの敵の周りに誰もいないことを確認して結界を張った後、まずはお札で動きを封じた。

グガガッ

大きな機械音が響き、仮想敵の動きが止まる。

それを確認した私は次にスペルカード宣言をする。

「日符『ロイヤルフレア』ッ！」

瞬間、本がパラパラと捲れ、それが止まったとき、相手を中心に地面に魔法陣が浮かび上がった。

その魔法陣は星形のマークと複雑な魔法式が書き込まれており、それは光を放ちながらクルクルと回転する。

直後――――

ゴオオオオオオオツッ！

という音を放ちながら紅色の火柱が発生する。

その火柱はクルクルと周りに、その周りには光る炎の螺旋が渦巻いている。

何処から見ても普通ではない炎は周囲をその光で照らしながらパチツパチツと火の粉を弾けさせる。

その火の粉は複雑な紋様を持つ結界に触れた途端、消失する。

私が本を閉じたときそこには……………

……………少し焦げたアスファルトと揺らめく陽炎以外、何も存在していなかった。

「終了……！」

実技試験の終了合図が演習場全体に響きわたった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

試験後、進む物語

「実技総合成績が出ました。」

試験から一日。

とある時間、雄英の教師達はモニターの前に集まっていた。

そこでは次々と受験生達についてを論議している。

そして—————

「まずは2位の彼ですね。」

モニターが切り替わる。

そこには仮想敵を次々と手から発生する爆破で倒し、回避の際にはその衝撃でで上手く軌道をそらす少年が居た。

「救助ポイントだったの15で2位とはなあ……！」

「仮想敵を見つけた時の判断力、何度も何度も交戦して尚、威力を下げずむしろ上がらせるタフネス性。状況に応じた個性の応用。」

そして威力については申し分無いですね。」

「ただ少し救助の積極性にかけているのが難点だなあ。」

「それについてはこれから此方で学んでいけばいいじゃないか！」

賛否が飛び交う中、高い声が響く。

その発言をしたのは、熊のような犬のような白い生物————雄英高校の校長だ。

その発せられた意見について同調する教師も居れば、無言でいる教師もいる。

ただ、今後の彼に少しの期待を寄せている点では同じだろう。

「対照的にヴィランポイント0で9位の緑谷出久。」

またモニターの映像が切り替わる。

そこには緑髪の少年が衝撃波で0ポイントヴィランを倒してもいる映像が映っていた。

その少年の腕は骨折やら何やらで内出血が起こっており、見るからに重傷だ。

「最初は現れる仮想敵に怯え逃げる、状況を上手く判断出来ずに慌てふためく、正直最後の身を賭して受験生を仮想敵から助けなければとてもじゃないが合格は絶望的だった」

「ああ、だがそんな状態でも咄嗟に助けるといふ行動が真つ先に出た。『個性』が制御出来ていないとはいえヒーローの本質とも言える意思が彼にはある可能性がある……。だからポイントが与えられた。」

「それにアレに立ち向かった生徒は過去何人か居たけど、ぶっ飛ばして尚且つ倒す生徒

は久しく見てなかったね。それが今年は二人も出るだなんて驚きだよ！」
「興奮して思わずYEAHHH！って叫んじゃったぜ！」

審査員の一人であったプレゼント・マイクがそんな言葉を溢す。

少しの間話は続いたが、そこはプロ。

すぐに話題をもとへ戻し次へと進めようとする。

長々と進行を止めるなんてことはしない。ここにいるのは全員教師でありプロヒーローなのだから。

「……………」まあ、それ以外にも理由がある。

それは……………」

「……………」そして2位にポイント差をつけて一位になったこの少女。」

「……………」最大の問題といえる人物が残っていたからだ。

映像を変えたモニターが映したのは一人の紫髪の少女。

その少女は合図と同時に飛び上がり、開幕から一つのカードを手を取ったあと大声で技を宣言し、何やら光る丸い紋様の中から仄かに光る木の葉を発生させ、前方の敵を一気に片付けていた。

何人かはその光景に目を奪われる。

「先程挙げた二人と同校の受験生、パチユリー・ノーレッジ。」

ふと後ろから何の反応も無いことに気付き、一人の女教師が振り向く。

すると—————

「はぁ—————。」

と、死んだ魚の目で疲れきった溜め息をつく教師、もとい相澤消汰が居た。

S I D E：相澤消汰

（あの時もあったが、あいつやりすぎだろ。

乗り遅れたのは自業自得だが、これで出鼻をくじかれた奴等には同情せざるを得ない。）

俺は溜め息をつきながらそんなことを考えていた。

あいつの個性は「魔法」。

姉さんの個性「状態効果付与」。

リックさんの個性は知らないが、恐らくその個性と祖先の個性が混ざって変化したのだろう。

「開幕から反応できる反射性、周りへの披弾を防ぐための操作性、敵に気付かれず接近できる隠密性、複数の敵への対処を可能とした情報処理能力。

そして何よりも—————」

校長が言葉を止めてモニター画面を切り替える。

それは多くの教師が驚愕した光景だった。

「……………今までとは違う圧倒的に高火力の炎。

紅からオレンジへと変化し、不思議な美しさと暖かさが見える炎は0ポイントの仮想敵を覆い、そして灰すらも残さずに文字通り消し去った。

太陽に起こる大規模なプロミネンス……………フレアを彷彿とさせる。

その強大な自然現象を彼女は起こして見せたのだ。

だが何よりも凄いのは……………

「……………見てごらん、あの炎を覆っている膜を。」

それを覆っている膜だ。

あの炎の側であつたらそれなりの熱を発生させるだろう。

だがあの膜は外側への影響をほぼ無くしている。

その証拠に彼女が本を閉じたとき、そこには少し焦げたアスファルトと陽炎だけ。

あんな攻撃力と防御力をあの年で兼ね備えているのだ。

俺はそれ以外にもまるで、何度も戦ってきたように感じた。こいつのすべての行動が歴戦のヒーローのように手馴れすぎているのだ。何か、何か重要なことをこいつは隠している。

それは俺達の想像を上回る————

「彼女はそれに加えて防御性、そして適切な人材に救助を呼び掛ける判断力。強大な力を持つ個性を制御し、尚且つほかの能力を身に付けているのは大したものだよ。」

校長が言葉を区切る。

その言葉を聞き、俺は頭を振って目の前の事に集中する。分からないことを今考えるのは時間の無駄だ。

先の発言から少しして神妙な声色で一人の人物が声を上げる。

「……………彼女がヴィランに堕ちてしまったら危険ですね。」

トツプヒーロー……………オールマイトだった。

辺りに静寂が訪れる。

思案顔、不安な者が多数。あのマイクですら何時もとは違って真剣な表情になっている。
る。

「—————安心してください。貴方がたが敵では無かったら私はそれに協力致しますわね♪」

「そうだよ。だから僕は……………ッ!？」

静寂の中、突然聞き慣れない声^{こゝろ}がそれを切り裂く。

どこからともなく聞こえた声に全員が反応し、俺達は即座に臨戦態勢に入る。

「誰だッ！」

一人が声を上げる。

全員が全員自分達の居る外側を警戒する。

だからだろう。

「あら、フフツ。自己紹介がまだでしたわね。

私の名前は八雲紫。

よろしくお願い致しますわ♪ヒーローの皆さま方。では」

「—————敵が笑いを浮かべながら自分達の背後をとっていることと、

「—————少しばかりお時間を下さいな。」

それに気をとられていた時には俺達の足元には床が無かったことに。

俺達の意識は突如、暗転した。

S I D E O U T

「さて、と。

邪魔者が来ないうちに私もいかないと。」

扇子を開いて口元を隠しながら紫はそう言つて目玉が覗く空間を開き、その中に消える。

突如として誰もいなくなった。

そこで

「………おやおや、クククツ。見つかつてしまいましたか。」

残念そうに私が呟いた声が響いた。

S I D E : パチュリー・ノーレッジ

「ただいまー。」

自宅に着いた私は疲れきつた声で言う。

すると、

「おかえりー！」

案の定、母さんが出てきた。

．．．．．こちらにバツファローの如く突進しながら。
私はお札を構え、投げる。

「天誅！」

「ハハツ甘い！」タタタッ

だが、あつさりと避けられてしまった。

さすが元プロの母さん。

叔父さんと捕縛道具不使用で喧嘩したとき毎回勝っているのは伊達じゃない。

「つと、試験どうだった？」

先程のことを何事もなかったかのように流す母さん。

けろつとした表情で話題を戻すのは何時も通りだ。

「筆記試験は簡単過ぎてはつきり言つて拍子抜け。」

「流石中学校の試験で毎回だいたい100点取っているだけあるわね。」

「実技は結構できた方だと思うわ。」

．．．．．結果を見なきや分かんないけど。」

私はそう区切つて部屋へと足を運ぶ。

「あつそうだ！お祝いに私の試験の話でも．．．．．」

「何回も聞いたわよ。」

「あ、ちよつと、待つ」

ドアを閉め、私は部屋の椅子に座る。

「はあ——」

私は本を開き魔法の修正点を書き込む。

やはり弾幕を展開したとき、他にもダメージが少なからず及んでしまう。何か結界の防御性を高めるものは——

「——————どうだったかしら？ 私の人形。」

後ろからこちらに歩いて来る足音、そして聞きなれた声が響く。横目で確認すると予想通りの人物がいた。

「——————ええアリス。お陰で助かったわ。」

はい、これ。」

「どうも。」

私は部屋にいる彼女————アリス・マーガトロイドに返事をし、人形を返す。アリスは人形を受け取り、ソファに座る。

アリスは何時もそっけないが、今回は何時にも増して上機嫌のように見える。

ふと、私は時間を確認する。

・・・さて、そろそろ来る頃かしら？

「ばあー！」

「うわつととー！」

アリスは突然現れた彼女に驚き、持っていたティーカップを落としかけた。まあ、紅茶は少しこぼれ落ちてしまったが。

その驚きようを見て、少女は面白そうにわらう。

「・・・・・・・・どうしたの、こいし？」

気を取り直してアリスが少女「・・・・・・・・古明地こいしに話しかける。

これで10回目だ。

アリスはいつになつたらこれに慣れるのよ。毎回毎回驚かされて飽きないのかしら？

「今日、顔に手が一杯ついた人を見かけたの！」

で、ついていっただら路地裏に入ってそれでビルに着いて、なんかお酒が沢山置いてあるところ・・・・・・・・バーだったかな？そこに入ったの。

で、黒いモヤモヤした人と何か話していたよ。

内容は分からないけれど。」

「ふむ．．．．．？」

こいしの楽しそうな発言を聞き、私は少し考える。

路地裏、ビル、そして酒場．．．．．ヴィランかしら？

酒場つてことは何人も集まる．．．．．つてことは何か起こる。いや、始まりそうね。

「場所は？」

「うーん。無意識のまま歩いていたら分からないや。」

「そう．．．．．」

こいしの思案顔を横目に私は考える。彼女は無意識に色々な場所に歩んでいく。それは大事なものか．．．．．それとも．．．．．

．．．．．もしかしたら、異変の手がかりになるかも。

「何か起こりそうね。」

「．．．．．はあ。そうねアリス。」

ねえ、リグルに連絡をお願い出来るかしら？」

「分かったわ。彼女は多分人形を持ってはいるはず．．．．．少し試してみる。」

リグルは虫を操れるから情報収集にうってつけ。しかもそれだけの情報があれば手がかりを掴める．．．．．はずだ。

私は本に式を書き込みながらこれから起こることを思いながら溜め息をついた。

T
o
b
e
c
o
n
t
o
n
u
e
d.
:

雄英高校

登校と回想と波乱

SIDE：パチュリリー・ノーレッジ

私は登校の最終確認をやらされている。

「ハンカチは？」

「持った。」

「ティッシュは？」

「・・・持った。」

「OK！いつてらっしやい！」

「・・・いつてきます。」

びしっと手をあげながら確認しているのは朝っぱらからテンションの高い母親。平常運転である。

私はその慣れた感覚を懐かしみながら靴を履き、服装を整え、ドアノブに手をかける。

「あ！それと」

「・・・今度は何よ。」

母さんが声をかけてくる。

それを聞いて私は呆れながら顔だけ後ろを向く。

「パチエ．．．．．いいスタート切りなさい！スタートが肝心よ！」

「!!．．．．．はーい。」

私はその言葉に一瞬呆気にとられ、少しむず痒く感じながらもドアに向き直り、その手に力をかける。

「んじゃ改めて．．．．．いつてきます、母さん。」

「いつてらっしゃい！パチエ！」

私はドアを開け、その初めの一步を踏み出した。

ゝゝゝ

「．．．．．流石に出るの早すぎないかしら。」

私はまだすこし明るいだけの空を見上げながらそう呟いた。

ゝゝゝ

ゝ少女移動中．．．ゝ

「ふう．．．．．着いたわね。」

私は学校を見上げながらそう呟く。

入学書類にあったマツプを見ながらその規模のデカさにまたため息が出る。

(「—————そういえば、今年からオールマイトが教師に来るんだったかしら。)
私は試験の合否通知が来た時の事を思い出す。

—————遊ぶこと入試から一週間後のある時間

私はその日、いつものようにアリスと共同で魔法の研究をしていた。

「パアアアアアアアアチェエエエエエ！」

私が入来たわよ！」ドカツ

「……………母さん？」

「……………あら、こんにちは。」

「アリスちゃんこんにちは！パチエ、我が娘よ！来たぜこの時が！」

何処か興奮した様子でドアを蹴破ってきた母さん。キヤラが凄いことになっている。

その手には何か小包のような封筒があった。

なんだろうと思って聞いてみる。

「なにそれ？」

「雄英からの通知よ！」

んじゃ、私はこれで……!!」

そそくさと母さんは戻っていく。相変わらず嵐の様な人だ。

雄英……ああ、もうそんな時期か。

「開けてみないの?」

アリスは何処か興味津々な様子で聞く。

私はそれに頷き、中身を見る。

その中には一つ、手のひらサイズの機械が入っていた。

おもむろにそれに付いているボタンを押す。

ポチツ 『私が投影された!!!』

「プフッ」

どうやらそれは映像投射機だったようで、オールライトが壁に逆さまに投影された。

それを見てアリスは少し吹き出す。

私はそれを横目に見ながら機械を机の上に置く。

『前置きはさておき、肝心の試験結果だが……』

突然重々しい雰囲気放つ。メディアへの対応に慣れたり、出演してたりしているか

らか此方にも伝わってくる。

そして、口を開いた。

『筆記はほぼ満点！実技のヴィランポイントは152点！“ここまででも”2位を遥かに超えての合格だ。』

ふむ、やっぱりあるらしいわね。もうひとつの要素。

『だが、我々が見ていたのはもうひとつある。それは救助ポイント!!ヒーローに必要なのは武力だけじゃなく正義感も必要だ！君の救助ポイントは48点！。合計できつちり200点だ！ぶつちやけ点数上げつないね君!？

まあ堂々と首席での合格だ！おめでどう!!』

それが終わり、色々な事があつたが今に戻る。

私は“1-A”と書かれた教室のデツカイ扉を通り、入る。

どうやらまだ誰も来てはいない様だ。

そんな事は気にせず私はいつも通り本を取りだし読書をする。

10分後……

「！僕より先に登校している生徒がいるとは！君の名前は！」

何だか何処かで見たとようなメガネをかけた男子が来た。

「……………まずは自分から名乗るべきじゃないかしら？」

「おっと、済まない!!僕は飯田天哉だ！」

「私はパチュリー・ノーレッジ。ファーストネームはパチュリー、ファミリーネームが

ノーレツジよ。」

「そうかい!宜しくノーレツジ君!」

カクカクした優等生の様な男子はそのまま背筋を真つ直ぐ伸ばしたまま席で座っている。

それから何分経つたかは知らない。

気が付くと教室内で喧嘩が起きていた。

そんなことはどうでもいいと私は本を読み続ける。

なにか声をかけられた気がするが気のせいだろう。

予鈴が響く。

なのにこの教室は騒然としている。

「はあ……予鈴が鳴つても静かにならないなんて。時間の無駄ね。

これで除籍されても知らないわよ。」

小さな一言。

それは教室の空気を凍り付かせた。

そこにできた静寂。

驚愕に染まった教室。

「――その通り。」

「この校風は自由。それは教師も同じ。」

それを切り裂いたのは、何故だか聞き覚えのある声だ。

「はい、予鈴が鳴った後席につきました。まあ、まずまずといったところか。」

俺はこの担任の相澤消汰。よろしくね。」

「……あんたか叔父さん。」

私は取り合えずため息を着いた。

「とりあえずこれ着て全員グラウンドに集合。」

「……流石私の家系ね。やっぱり自由人だわこの人。」

私は皆が混乱している中、体操服を受け取り更衣室に移動した。

個性把握テスト

SIDE：パチユリー・ノーレツジ

「個性把握テストオ!?!」

突然の出来事に驚くクラスメイト達。

そりゃいきなり入学式を飛ばして個性把握テストをするって言われたら誰だって驚くでしょうね。

まあ、私も少々驚いているんだけど。

「入学式は!?!ガイダンスは!?!」

丸顔の女子が驚きながら質問する。

それを見て担任である叔父さん基——相澤先生は

「ヒーローになるならそんな悠長な時間はない。」

その言葉をバツサリ切り捨てる。

この人何回も除籍にしてきたんだっけ。

恐らく去年の初日で一クラス丸ごと除籍にしたのはこのイベントを行ったため。

つまり、ここで本気を出さないと除籍……

「さっきノーレッジが言ってた通り、雄英は自由な校風が売り文句だ。当然それは”教師側”も然り。そこでお互いの自己紹介も兼ねての個性把握テストだ」

成る程。今の実力と延び白も把握でき、尚且つ自己紹介に時間をかけることがない。実に合理的ね。

「皆一度は中学でやった事があるだろ個性禁止の体力テスト。」

そう言つて振り向き、先生が見せてきたのはタブレット端末。

その画面には、

- ・ ボール投げ
- ・ 立ち幅跳び
- ・ 50m走
- ・ 持久走
- ・ 握力
- ・ 反復横跳び
- ・ 上体起こし
- ・ 長座体前屈

と表示されていた。一般的な体力テストの内容だ。

ボール投げの部分は、ソフトボールかハンドボールかで異なるが。

「あれは個性で溢れた今の社会じゃ余りにも不合理すぎる。それでも国は頑なに画一的な記録を取ろうとしている。……まあ文部科学省の怠慢だよ。」

おー、さりげなくキツイ事言うわね。

まあ確かに個性無しというのは今の社会には合わない。

でも、基礎能力を知った上で個性でどれだけ伸ばせるかを知ることができる。

それを知ることができれば個性無しの戦闘も踏まえてトレーニングとかができるから、やるのも無駄ではないんじゃないかしら。

「確か今年の首席は………ああ。」

面倒だからつとこつち向いて死んだ目にならないで欲しいわ。

そしてそれにつられて全員こつち見ないで。

何か気まずいじゃない。

「………ノーレッジ。」

「はい、何でしようか相澤先生?」

取りあえずニツコリと微笑んでおく。

((………怖い!?笑顔が怖い!))

——彼女が無意識に放っている苛立ちに何人か心の声が一致した瞬間である。

「……お前、去年のソフトボール投げの記録はいくつだ。」

「37 m。」

「……よし、円の中で何使ってもいいから個性使って思いっきり投げてみる。」

「はい。」

私が答えた後の微妙な間は何よ。

「……はあ。さて、投げろ、ねえ。」

「……個性を使えば何でもいい？」

それは自らの腕で飛ばさなくてもいい、ということかしら？

私はそれを確認するために問う。

「もう一度確認します。個性使えば何でもいいのですね？」

「ああ、はよ。時間の無駄だ。」

眠そうな瞳で彼はそう言った。

それに頷き、イメージをする。

(浮かべ。)

すると、ボールから手を離してもボールは浮かんだままの状態で止まった。ま、初歩

的な物体浮遊魔法だ。

次に、

(飛んでいけ。)

私はそれに移動魔法を重ね掛けする。

するとそのまま重力に反してボールは一直線に青空へと飛んでいった。

「……………おいノーレッジ。あれは何処まで飛ばせる。」

「何処までも。」

あれは何処までも飛ばすことができる。魔力消費が少なすぎて実質0だからだ。

「……………成る程。」

何処か諦めた表情で先生は記録を表示する。

・∞・

——無限。まあ、妥当だろう。

「無限?!」

「個性を最大限つかえるのか!」

「なんだか面白そう!」

「ウチと似たような個性やなー。」

様々な感想が飛び交うなか、先生の方を見てみる。

……さつきとは表情が違う。

眉をピクリと一瞬震わせ、目を若干細めている。

あー、これは……

「……面白そう、ね。」

ヒーローに成るための三年間、そんな腹積もりで過ごすつもりかい？」

小さく放った一言が全員の意識を集中させ、辺りが凧のように静かになる。

あーあ。やつちやつたわねえ。あの目は間違い無く本気だわ。

「よし、8種目トータルで成績最下位の者は『見込み無し』と判断し除籍処分としよう。」

先生がニヤリと笑う。

「生徒の如何は俺たちの自由。ようこそ。ここが雄英高校ヒーロー科だ。」

クラスメイトは困惑、息をのむ者もいれば、手を握り締め、覚悟を決める者もいる。

そりやそうだ。これから始まるテストでこれからが大きく変わってしまうかもしれないのだから。

「最下位除籍ツ!!?入学初日ですよ!?!いや、初日じゃなくても理不尽過ぎる!!」

その一人である茶髪のポプヘアーの女子が声を上げる。

まあ、もつともな反応だろう。

「自然災害、大事故。」

その声に答えるように、先生は語り始めた。

「そして、身勝手なヴィラン達。いつ、どこからくるか分からない厄災。日本は理不尽に溢れている。そんなピンチを覆していくのが『ヒーロー』。」

放課後どつかで談笑したかったのならお生憎。

これから3年間、雄英は君達に全力で苦難を与え続ける。更に向こうへ、『Plus Ultra』さ。

全力で乗り越えてこい。」

最後をより力強くして彼は言い放つ。

本気でヒーローを目指す者のみしか通れない最初の関門。

——まあ、彼は「ヒーローは生半可な覚悟じゃ通れない。」と言いたいのでしょう。それを実感してきた。

いや、「しすぎた」者だから。

「デモンストレーションは終わり。こっからが本番だ。」

先生はそう言い放った。

しかし、「見込み無しと判断し除籍」か。

私は先程の言葉を思い返す。

これは最下位でなくても “見込みなしと判断されたら除籍になる可能性” があるわね。

いや、あの人のことだから絶対除籍になる。

まあでも、裏を返せば

“最下位でも見込みありと判断されたら除籍は免れる。”

ということになるから、“撤回する可能性” も同じようにある、と。

まさか、入学式じゃなくてテストが初のイベントだなんて。

さすが校風が自由なだけあるわ。

——さーて。少し本気を出しましょうか。

く50m走く

『ヨイ、スタート』

ビュンツ！と、勢いよく飛び出した男子……。たしか飯田だっけ？が脚にあるエンジンらしき部分から炎を出して走る。

ピピツ 『3秒04』

へえ……。中々速いわね。

ま、水を得た魚。これからどう動いていくか楽しみね。

私はこの50m走をどうするかを考える。

増強型のようにしても良いのだけれど、それは少し苦手だし……

……よし私は少し思考し、方法を考えた。
そして頭の中で魔法式を組み立て、ゴールラインに意識を向ける。
上手くいけば……

今のうちにやってもいいわよね？

「次、爆豪、ノーレツジ。」

うわーお、よりによって勝己とか……

ちらつと横を見れば、こちらを睨むように見た後目をそらした勝己がいた。

『ヨイ、スタート』

私は即座に魔法を発動し、ゴールラインに移動した。

周りから見たら突然私が消失して突然現れた様に見えるでしょうね。

ピピツ『0秒48』

……やっぱりこれは準備時間とラグと反応速度とか色々な問題があるから使い勝手が悪いわね。

「うわっ！すごい！」

「浮遊系の個性じゃなかったのか!？」

「……やっぱりすごい……!」

ピピツ『4秒07』

「……………チツ」

少し経った後、勝己が到着した。

その顔は速い記録を叩き出したのに舌打ちしたりと何処か不満そうだ。

あとこちらを凄く睨んでくる。つり目がさらに吊っている。あんなに上がるのね。

「おいノーレッツジ!どんな手使いやがった!?!」

「見た通りよ。」

「……………チツ!」

勝己はさつきよりも強く舌打ちしたあと、歩いていった。

……………結局のところ何だったのかしら?!

「ねえねえ!すごいね!どんな個性なの?あつ、私あしどみな芦戸三奈!」

「たしかにすげーよな!俺なんて固くなるぐらいしかできねーし。俺は切島きりしまえいじろう鋭児郎!よ

ろしくな!」

「私は麗日うららかにお茶子!さつきのもだけど、どうやってやったん?おしえてくれんかな?」

おおー。結構人が集まってきたわね。

何人も一度に来たら結構困るのだけれど。

まあ、自己紹介くらいはしておきましょう。

「私はパチュリー・ノーレッジ。個性については……まあ、またあとで。」

私はちらつと先生の方向を向いた後、向き直る。今聞かれても遅れるだけだし。さつきから先生の目が早くしろつて訴えているし、ね。

ピピッ『6秒58』

「……………」

音がした方向を振り向くと、乱れた呼吸を直しながら思案顔をした後、何か決意をした表情をした出久がいた。いつもの時に比べたらちよつと変ね。何かあったのかしら？ 周りを見ると、一部怪訝そうな表情をした生徒もいるし。

……………今考えても仕方がないわ。次へと進みましょう。

く握力く

これは身体強化魔法を……………いや、時間を少しかけて下の部分が上の部分を強く引き寄せるようにして、上の部分に圧力をかければ……………

「よ……い……し……よ……」

「お……」

「？……は……」

「……………もういい。壊れるからやめろ。」

《測定不能》

「うわっ！増強系の個性!？」

「一体どんな個性なのでしょうか……………」

本当は違うのだけれど……………まあ、傍から見ればそう見えるでしょうね。

↳立幅跳び↳

これは簡単すぎる……………ていうか私の場合跳び要素皆無ね。だって……………

「私飛べます。」ヒョイッ

「……………おいノーレッジ。そのまま何時間飛べる。」

「文字通りいつまでも。なんならこのまま一週間飛んで見せましょうか?」

「……………」

《8》

「また無限!？」

「……………ケツ!」

「パチエちゃんやっぱり凄い……………」

「……………」

↳反復横跳び↳

脚の強化、スピード上昇あとは視点を一点に合わせて……

・ 162回・

「はやっ!?!」

「パネエ……………」

「揺れてる……………」

「サイテー」

「最低よ」

くソフトボール投げく

うーん、同じ感じにしてみようかしら?でも……………

……………そうだ。

私は少し思案し、取りあえず簡単な精霊魔法で手から水を大量に出す。

そして頭の中でいくつかの魔法式のイメージを浮かべ、手にある水の塊を大きな鳥の姿に変える。鳥の体長は大体3mぐらいだ。

「スゲエエエ!?!」

「デカッ!?!」

何か周りが言っているが私には関係無い。

魔法を使う上で大事なのは創造力。

それは命令を下すまでは崩してはならない。

(「……このボールを遠くまで運べ。)

私はその鳥に脳内で命令を下す。

すると鳥はボールをくちばしに見える部分でくわえ、その大きな羽を羽ばたかせ運んでいく。

蒼つぽい透明な鳥は羽ばたく度に水飛沫が散らせ、それが太陽に照らされてキラキラと輝き、その軌跡は弧を描く。

そして、澄んだ青色の空の中、ただ真つ直ぐに飛んでいく。

「……おい。」

鳥が小さく見える位になった時、先生が声をかけてくる。

「あれは何処まで飛んでいく?」

「私が命令を破棄、または変えない限り何処までも」

私はそう淡々と答える。

この鳥は私の魔力が尽きるか命令を変えるまでは飛んでいく。

消費魔力は少ないため、何時間飛ばしていたとしても私の魔力回復速度の方が上回り
実質無限に飛べる。

「……………ハア。」

少々疲れた表情で先生が溜め息をつく。
すると、モニターに記録が出てきた。

『8』

こんな魔法を使うのは結構久しぶりね。

「マジかよスゲエ!?!」

「今度は水!?!」

「でっかい鳥だなー!」

「……………」ソワソワ

私は鳥を此方に戻したあと、ふと視線を校庭の隅へと向ける。

「うん?」

「……!?!シート!」

……………なにやってんのオールマイト。

私の視線の先には何やら此方の様子を盗み見ているオールマイトが居た。何が目的なのだろうか。あの慌てようからしてどうやら他の人には知られたく無いようだが。

オールマイトは私から目をそらしてある一点の方向を見ている。

その視線の先には……………

……出久?

出久がいた。

もしかしたら彼に何か関係が……ありえるかもしれないわね。

出久に関係する事柄だったら……オールマイトが今、それも個性把握テストに居るのだとしたら個性に関係すること、もしくは彼の成長をみるため……私ひとりあえずそれを知るために出久の行動に注目してみる。

次は出久の番だ。

「緑谷君、このままだとまずいぞ。」

飯田がそういう。？どういうことだろうか？

「ああ？つたりめえだ。あいつは無個性だぞ？」

「無個性!?彼が入試時に何を成したか知らんのか？」

「……は？」

「え？」

呆気にとられ、声を漏らす私たち。彼が無個性じゃない？いったい何があったのかしら……

「……」

？先生が何か……何をするつもりなのかしら？

「つゝ!!」

ボールを振りかぶり、個性を発動させる出久。に、目を向ける相澤。あつ、あれは………

「とりや!!」

一瞬何か火花が弾けていた様に見えたが、投げたボールは地面に叩きつけられた。記録は《46m》。そう、普通の記録だ。

「なっ!?今、確かに使おうって!」

なのに彼はどこか焦った表情をしている。無個性であるならばこれは不自然だ。まるで彼に個性があるような……

「個性を消した。」

困惑する出久に話しかける先生。

「つくづくあの入試は合理性に欠くよ。お前のような奴も入学できてしまう。」

「ゴーストを外しながらそうぼそぼそと言う。」

「あのゴースト…….そうか!視ただけで人の個性を抹消する個性!『抹消ヒーロー イレイザーヘッド』!!」

「やや興奮気味に解説する出久。」

「そう、彼はイレイザーヘッド。彼はメディア露出を減らしているせいかな、あまり知られていない。」

……やっぱり彼が個性を発動させたとなると、出久には個性がある。それもさっきのことからして恐らくオールマイト関連の、ね。まあそれはあくまで推測ではない。個性が突然発現した可能性だってある。詳しくは本人から聞き出したほうが早いだろう。

そして何か指導のようなことをされた出久は、思案を巡らせている。

そのあとの先生の顔からして彼は見込みなしという判断を下される可能性が高い。

……このままだったらの話だけど。

いまの彼の表情には決意が灯っている。……おそらく何か考えがあるのでろう。

——瞬間、とんでもない衝撃波を伴い空高く舞うボール。

指を負傷したようだが、その記録705.8m。出久はそれでも尚、まだ動けます、と涙ながらに宣言した。

先生の表情が一変し、口角を上げたのが遠目からでも分かった。

確定ね。脱落者は出ない。残りの種目は持久走、上体起こし、長座体前屈。

今見たところ彼の個性は筋力増加系、そして負傷を伴うからあの個性の残りの種目での活躍機会は無い。つまり仮定の通りだったら彼がトータル最下位。

しかし今、先生は彼のことを見込みありと判断した。おそらく出久が彼の考えを動か

す何かを……

ヒーロー足りえる素質を示したから。

(……フツ、やるじゃない。)

私の口角が自然と上がった。

「……っ！」

ふと勝己を見てみる……驚愕、怒りなどの表情が見て取れる。

あつ……

「どういう事だ！ 訳を言えデクてめっ——?!」

勝己が殴り掛かる。だがその拳が振り下ろされることは無かった。

なぜなら……

「落ち着きなさい、勝己。」

私が咄嗟にお札の鎖で拘束して止めたからだ。お札は手に持っていないとも数が限られるが魔法で出すことができる。お札で拘束して尚、勝己は抜け出そうと暴れている。

はあー。面倒くさいわね。

「……気持ち分かるけれど事実なんだから仕方が無いでしょう？」

「……………」

「今すると面倒だから理由はあとで出久自身に聞くのが一番いいわ。……私も聞きたいし。」

「……………チツ。」

出久の方向をチラリと見ながら目配せをする。それを理解したのか、勝己はおとなしくなった。

もう暴れる心配がないと判断した私は、お札の鎖での拘束を解いた。

何気にこれあの時以来ね。

「つたく、何度も何度も個性使わせるなよ。俺はドライアイなんだツ……………」

あ、勝己が全然個性使って無いなど思っていたら先生が個性を発動させていたのね。

……………つくづく思うのだけれど、

(（すごい個性なのにもつたいたい!!))

ドライアイさえなければ……………まあ、個性を何度も使うとそうなるのでしょうか。

……………今度それを治すための魔法薬を作ってみようかしら？

まあ、それは置いておいて、

「出久、ちよつとけがを見せて。」

「?…うん。」

私は出久に回復魔法をかける。

手に発生した緑色の魔法陣から緑色の淡い光が発生し、それが負傷した部分へと吸い込まれる。そして……

「……はい、これでもう大丈夫よ。」

傷がある程度回復した。

「……！ありがとうパチエちゃん！」

喜ぶ出久。だが私は

「終わったら保健室に行きなさい。」

「……はい。」

取り敢えずまたこうならないようにくぎを刺しておいた。

(………にしても)

私はチラリとオールマイトのいる方向を見る。

彼の表情は喜びを浮かべている。やはりこれはオールマイトに関係があるのだろう。

「時間をもつたいない。次、準備しろ。」

次の生徒がボール投げに入った。

「……やっぱりあの時のあんただったんだね。」

突然横から声がかかる。振り向いてみると試験の時に出会った女子がいた。

「ウチは耳郎響香。じろうきょうかよろしく。」

「ああ、試験の時の。私はパチュリー・ノーレッジ。」

「……やっぱりあんたの個性すごいね。」

「そうかしら？」

「うん。あの時もすごかったよ。後ろを振り向いたらでつかい火柱が立ってたからびつくりした。」

「……そう。」

私は一旦話を区切る。今個性についてを話すと他が入ってきたりして長くなりそうだし。

(……ん?)

「……」

ふと私は視線を感じて振り向いた。

そこにはこちらをジッと見てくる男子がいた。彼は確か……轟だったかしら? 赤と白に分けられた髪と顔にある大きなやけどの痕が目立っている。個性はおそらく氷……だが、溶かしたりもしていたからおそらく熱又は炎系統の個性を持っている。

私に何か気になることでもあるのだろうか……?

「……今関わるのは進行時間に影響が出るわ。聞くのは後にしましょう。
 〓持久走〓

これは飛びながらスピードを上げればいいわね。

『ヨイ、スタート』

私はスタートと同時に飛び、最初から段々とスピードを上げながら飛行する。

追いつかれたりすることは特になく、私は一位でゴールインした。

「……上体起こしと長座体前屈は普通のため割愛

〓〓

「んじゃ、パパつと結果発表。トータルは単純に、各種目の評点を合計した数だ。」

順位が張りだされる。

私が1位、勝己が4位、出久が……

「……僕、最下位だ。」

彼は最下位だ。

絶望の表情で固まる出久。それにちらちらと視線を向ける者もいるが、私はあまり心

配はしていない。

何故なら……

「ちなみに除籍はウソな。君達の個性を最大限引き出す合理的虚偽。」

『はあああ!?!』

「あんなのウソに決まっているじゃないですか。ちよつと考えれば分かりますわ。」

先生が発した虚偽の言葉に生徒は驚く。そして八百万があきれたようにボソツと言葉を発す。

先生も嘘つきねえ。初めから嘘なんて無かったのに。反応から察するに、殆ど全員がああ言葉の真意を読み取れていなかったからそれについては気づかれてはいないようだけど。

私は先生をジト目で見ながらため息をついた。

T o b e c o n t i n u e d

個性把握テストとその後

side:パチユリー・ノーレッジ

「これにて終わりだ。教室にカリキュラムなどの書類があるから戻ったら目通しとけ。」
個性把握テストの終わりを告げた先生はそう言った。各々が行動を始めたとき、先生が出久に

「緑谷。保健室で婆さんに治してもらえ。ノーレッジに少しやってもらったみたいだが、完治したわけじゃねえんだろ。だから行ってこい。明日からもっと過酷な試験があるから覚悟しておけ。」

と言つて保健室の利用届を渡し、先生は去つていった。

そのまま去ろうとする出久に私は小さな声で言う。

「……明日キツチリときかせてもらうわよ、その個性とオールマイトの関係性について。」

「——ツえ!?!」

出久が驚きの声を上げるが、私はそれを気にせず歩いていく。私のその言葉は、喧噪の中へと消えていった。

（ ）
（ ）
そのまま更衣室へ着いた私は着替えをする。その間にも、今日あったことを振り返りながら次の目標を決める。紅魔館に居たころは四六時中時間など気にせず本を読むことに没頭することができたが、この世界じゃそうはいかない。それに異変の黒幕を見つけるにはどうしたら・・・まだだ。手がかりが少なすぎる。うーん、気になることも特にないし、どうしたら・・・

「・・・なあなあ、ノーレッジちゃんの個性って何なん？」

私が思考の海に浸る中、突然麗日が話しかけてきた。なにとなしに聞いてきた素朴な疑問。

「そういえばさっきのテストのときもそれについて聞いてきていたけれど話しそびれていたわね。」

そんなことを思っていると、いつのまにか先程の麗日の言葉を聞いた他の女子が私の目の前に集まっていた。彼女らは先の麗日に同調するように一人一人が話し始める。

「私もテスト中ずっと疑問に思っておりました。ノーレッジさんの個性は増強型のようにも発動型のようにも捉えることができますもの。いったいどんな個性なのでしょうか。」

「わたしもよ、ケロ。耳郎ちゃんが言っていたのが聞こえたのだけれど、ノーレッジちゃ

んの個性つて色々なことができるのね。」

「そうそう。試験の時すごかったんだよな。」

「えー！何それ聞かせて！」

「つていうかどうしたらあんな風にうまく個性が使えるの!？」

「ーちよつと、一度に言われても分からないわよ。」

私はとりあえず話を止めさせる。あんまり一度に多く話しかけても私は聖徳太子ではないから分かるわけない。

そして私の言葉で周りに少しの静寂が訪れる。

「・・・確か私の個性について、だったかしら？」

そう言うのと彼女らは興味津々な顔をしながら首をうんうんと言うように振る。私はそれを見た後、はあーつと小さくため息をついた。

「私の個性は『魔女』。異形型と発動型が合わさった個性よ。」

私はそう淡々と簡潔に述べた。『魔女』という言葉に反応した何人かが驚き、そして目を輝かせる。だが何か疑問に思ったのだろうその中の一人ーー八百万が質問をしてきた。

「二つ程質問があるのですが・・・」

「いいわよ。」

「先程、異形型と発動型が合わさった個性とノーレッジさんはおつしやいました。ですが、握力測定の際のあれは増強型のようなものにも見えたのですが・・・」

「ああ、あれは単に下の部分が上の部分を引き付けるようにして、それから上の部分からも圧力を段々かけていったのよ。」

「えッ!?!・・・なるほど。確かにそれなら説明がつかますね。」

私の言葉に周りは驚いたりしているが、八百万は驚きはしたものの納得し、話を続ける。

・・・成程。彼女はその聡明さと分析力が長所ね。

「もう一つは先程のこととは関係ないのですが、朝のとき、あなたは〃これで除籍されても知らない。〃とおしやりました。」

「あ、それウチもきになってた。ノーレッジはなんでそういったのかなって。」

「あー確かにそうだったよね。先生も除籍は嘘つて言つてたし。」

・・・ああ。そういうえばそんなこと言つてたわね。まあ、あれは本当にあり得る話だし、彼なら”ヒーローになる者が時間の無駄を生み、それで人命救助やヴィランの捕縛に失敗するようなことを考えられないなんてもつてのほか。極めて不合理だよ君達。”と言つて除籍にしそうだからなのよね。

まあ、彼についてを知つていたらから言える話。彼女らはまだ理解していないから、

仕方ないといえば仕方ないのかしら……。

「朝のはちよつとした冗談よ。ヒーローになる者が時間の無駄を生み、それで人命救助やヴィランの捕縛に失敗するようなことを考えられないなんてもつてのほか。極めて不合理だからよ。」

「よかつたー。」

「あのとさびびつくりして心臓止まるかと思つちやつたよ。」

芦戸、葉隠が安堵の表情……声色で言葉を発する……さっきのはあまり怖がりすぎるのを防ぐための合理的虚偽。彼女たちが真実を知る必要はないだろう。

「なるほど、私達への気遣いだったのですか。ヒーローになるためにはもつと自覚し、気を引き締めていかねばなりませんね！」

……やっぱり八百万はどこか考えすぎてしまう部分と常識にとらわれてしまう部分があるわね。

「それにしてもあのとさびのパチュリーの声マジトーンですごく怖かつたよ。」

……今のが本当だと思ひ込んでくれて助かつたわ。下手をしたらバレていたかもしれないわね。

「あ、私葉隠透はがくれとおる！パチュリーって呼んでいい？」

「呼び名は好きにどうぞ。」

まさか私みたいな者にこんなに接してくるなんて思っていなかったわ。さすが雄英。コミュニケーション能力が高い人が多い。

「自己紹介が遅れました。私、八百万やおよろずも百と申します。」

「ねえ！ヤオモモって呼んでいい？」

「ヤオモモ!?! えっええ。いいですよ。」

「ケロツ。私は蛙吹梅雨あすいっゆよ。梅雨ちゃんと呼んで。」

「……そろそろ戻った方がいいんじゃないかしら？」

このまま続けたらきりが無いというか、さつき気をつけようとしたのに遅れるというのは避けたい。それを皆感じ取ったのか、全員荷物をまとめて教室へと戻る準備をし始めた。その中、私は一足先に教室へと帰る。

く下校く

ペラッ……ペラッ

……六歳の時に貰った魔導書今初めて読んだのだけれど、これを持ってきたあの男何者よ。なんで普通の人間が持っているはずのない知識についてが書かれているのよ。私の図書館にこれ系統の書物は少なくは存在していたけど今あるものよりも事細やかに……というかなんで私に渡してしかも送ったのかしら……

「あっ！パチエちゃん！」

「ノーレッジ君！本を読みながら歩くのは危ないぞ！」

そんな思案をしていたら聞きなれた声とあまり馴染んでいない声があった。顔だけ後ろに向けて見えたのは、こつちに駆け足で来る出久と歩いてくる飯田。

私はその場で立ち止まることなく、そのまま歩を進める。早く家に帰りた。

先に出久が追いつき、そのあと飯田が横に並ぶ。私は本から目を離さず歩き続ける。

「ノーレッジ君！歩くときには本から目を離すべきだ！」

「嫌よ。この歩いている時間も活用していかないと。」

「あはは……ごめん飯田君。パチエちゃんの本が好きで隙あらば本を読んでいるんだ。」

……出久の言い方が少し気に入らないが、いい。今はこの文章と事実を読み解かなければ……いや、正気を失うから今は見ておかないでおきましょう。

私は本を閉じ、袋の中に納める。そしてもう一つ別の本を取り出す。

「なるほど！熱心なのだな！……今取り出した本は？」

「魔法植物が載っている本よ。」

「魔法植物？」

「現代には存在しない植物とかが載っているけれど……説明が面倒くさい。」

「そんな本があるのか！」

飯田は驚く。まあ、こんな本に興味を持ったとして、それを手に入れることは無理で

しよう。

さーて、この本の中のどれを使おうかしら。一部は紫から貰えるかもしれないけれど……でも、あの世界は行き方が特殊で手順がややこしいし……

「おーい!! 駅まで? 一緒に行こー!」

……この声は確か……

「君は確か、無限女子!!」

「麗日お茶子です!!」

麗日だった。彼女がこちらへと来て並ぶ。

っていうか無限女子って……もう少しマシなの無かったのかしら? 呆れながら私は本を閉じて袋にしまう。

「えっと、飯田天哉くんと……緑谷デクくんだよね!

「デク!?!」

「あれ? 違った?」

こっちは単に間違えているだけね。まあ漢字だけだとそう間違えてしまうのかしら。

「デク」じゃなくて「いづく」よ、麗日。

「そうなんや! 体力テストの時爆豪って人が「デクてめえ」って言ってたからそつちやと思ってた!」

成程。元凶は勝己ね。勝己は出久のことを木偶の坊と出久の読みを合わせて「デク」って呼んでいる。つまりは蔑称だ。子供って時に大人よりも残酷よね。

「デクは、かつちゃんがバカにして……。」

「たしか昔から呼んでいるわよね。」

「蔑称か!!」

まあ、勝己がひとを蔑称とかで呼ぶのは仕方ない。蔑称で呼んだり知らない人の名前を特徴や『モブ』って呼ぶのがもう彼のデフォルトになっちゃってしまっている。こればかりは諦めるしかない。

……そういえば、何で私だけ苗字なのだろう。

「そうなんだ〜ごめん。でも、『デク』って頑張れって感じでなんか好きだ私!」

「デクです!!」

「緑谷くん!?!」

「おお……」

麗日にそう言われた瞬間出久の顔が赤くなり、そのまま答えた。私は若干引いている。それにしてもあの変わりようはすごいわね。でも蔑称を良い方向にとらえられるのはいいことなんじゃないかしら?!

私は少し微笑む。

「コペルニクスの転回・・・」

「こへ？」

「物事の見方が180度変わるといふことよ。」

「なるほど！」

私の言葉に麗日は納得した表情で拳でぽんつと手のひらをたたき、
．．．この子純粋すぎて裏表が確認できないのだけれど。

私たちは再び歩き出す。少しの静寂が訪れるが、その静寂の中話をしだしたものがいた。

「・・・ねえ、テストを始める前の相澤先生のあの発言、本当に合理的虚偽だと思う？」

「え？」

出久だった。彼の言葉に二人は疑問の声を上げる。私は何も喋らず黙る。

「僕、あの先生の顔は本気のように見えた。」

．．．気づいたのね。誰も疑問に思わなかった部分に。

「・・・それはないんじゃないかしら？」

「えつでも・・・」

「先生がそう言うんだつたらそうやとウチは思うよ？」

「そう、だよね。．．．うん、そうだね僕の考えすぎだったみたい。」

出久はそういつて苦笑いをする。だが、どこかまだ納得していないらしい。．．．真実を言ったとしても混乱を招くだけ。ならば嘘を信じていたほうが幸せなのよ。少なくとも今は、ね。

「ね、ねえ！二人とも名前で呼び合ってたけど、友達なん？」

「そうだよ！僕とパチエちゃんとかつちちゃんは幼馴染なんだ！」

「彼もなのか!?!でも彼は君にひどく突き当たっていた様に見えたのだが．．．」

「勝己はあれが平常運転よ。」

彼はああ見えて繊細なところがあるからねえ．．．人間、やっぱり見た目と態度だけじゃないって分かったわ。そういうと、飯田はそうか．．．と言って難しい顔になった。私はまた袋から本を取り出して読書を再開する。

波乱があつたが、悪くはない一日だった。

To be continued...

戦闘訓練

side：パチユリー・ノーレツジ

「パチエちゃん！一緒に来るかー？」

「毎度毎度言ってるけど、私に食事なんて必要ないわ。」

お茶子の誘いを私は断る。

種族魔法使いのような者は食事、排泄が必要ない。それを説明しても毎度毎度彼女はこう誘ってくる。

私はあのマーガトロイドのように楽しむために食事をしない。必要ないから魔導書を読む時間としている。これの何がいけないの？

私はそう思いながら読書をする。今回はエイボンの書だ。ラテン語で書かれたこの写本は現存する中でも一番古いものであるが、あまり読むことはない。だって下手に正気を捧げてまでハイリスクなことをして死にたくはないもの。

この辺の知識は多少は知らなければならぬけれど、それ以上の関わりはしない。やるとしても眷属の召喚とか呪文をいくつかつかうくらい。……あのときアレを呼び出してしまったとき以来ね、これを読むの。

まあ、読んでいる一番の理由はあの本が新しくも古い知識やネクロノミコンとこれにまで記載されていない内容が見つかったからなのよね。題名もないし、

ー読めば読むほど不思議でしかない。うーん、思いつきそうだけと思いつかない。なんでかしら？

そうこうしている間に教室に段々と人が戻りだす。それぞれ浮き足立っているもの、期待を寄せているものが多いことが雰囲気や様子で感じ取ることができる。

前方と後方で席に着く音がした。まあ、あの二人だろう。

キーンコーンカーンコーン

響くチャイム音。その音とともに私は本をしまう。

「わーたーしーがー!!」

「き・・・」

「普通にドアから来た!!!」

いつものセリフとは違う決め台詞で、勢いよく開いたドアから一度見ただけで忘れてくても忘れられなさそうな風貌と雰囲気を持っているNo.1ヒーロー・・・。オルマイトが現れた。

相も変わらず暑苦しいわね。主に雰囲気だ。

「オ、オールマイトだ・・・!」

「すげえ！本当に先生やってるんだな！」

「あれ、シルバーエイジのコスチュームね。」

「画風違いすぎて鳥肌が。」

興奮するクラスメイト達。人気なのねえー。

「私の担当は、ヒーロー基礎学。ヒーローの素地をつくるため、さまざまな訓練を行う科目だ。単位数も、最も多いぞ。さて！早速だが今日はこれ!!」

ババアーンという効果音のつきそうな勢いで突き出されたのは《BATTLE》という文字のついたプレート。戦闘訓練ねえ……おそらく対人戦ね。

「戦闘訓練!!」

「戦闘お！」

「訓練っ！」

「そして！入学前に送ってもらった個性届と要望にそってあつらえたコスチューム！」

教室の、生徒達から見て左側の壁に、番号の書かれたロッカーがスライドしながら出てきた。その光景にほとんどのクラスメイトは新しいおもちゃを見つけた子供のように目をキラキラと輝かせている。

話の流れからしてこのロッカーにコスチュームが入っているのだろう。……私のはこの中には無い。こちらの作ったもののほうが魔法効果やらなんやら付与できるか

ら何かと都合がよい……というかいちいち魔法を付与する時間が惜しいからだ。
「着替えたら、グラウンドβに集まるんだ!!」

さて、移動しましょう。

〜少女移動中〜

「あら？ノーレッツジさんはコスチュームをお持ちで無いのですか？」

更衣室に着き各々が着替えを始める中、百が話しかけてきた。

「私は頼んでいないわ。だって……」

私はそう言つてパチンと指を鳴らす。

すると今まで着ていた雄英の制服が、幻想郷にいたときのを少し変えた今の私の衣装に変わる。そして、長い髪の毛にリボンが結ばれ、三日月の飾りがついたドアノブカパーのような帽子が頭の上に現れる。

「……もうあるもの。じゃあね。」

私はそう静かに言う。その後、啞然とするクラスメイトを背に、私は一足先に出ていった。

〜少女移動中〜

「……………」

私はその場に座って本を読んでいる。

「………さて、もうそろそろ始まりそうね。」

「さー！戦闘訓練のお時間だ！」

ここは、グラウンドβ。もうそこにはオールマイトが立っていた。

その目の前に個性豊かなコスチュームに身を包んだA組メンバーが全員集まっている。全員というわけではないが、コスチュームをきて浮足立っている。……一人一人で手だけ浮いているのかしら？

「先生!!」

白いアーマー姿の……声とあの姿勢からして飯田だろう、彼が質問をする。

「ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか！」

「いいや！もう二歩先に踏み込む。」

飯田の質問にオールマイトは左手の指を二本立てながら答える。

「ヴィラン退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内の方が凶悪ヴィラン出現率が高いんだ！軟禁、監禁、裏商売、このヒーロー飽和社会！」

そこで一度切り、ゴホンッ！と咳払いをした後、音量を落として彼は続ける。

「真に賢しいヴィランは、闇に潜む。」

どこかから息をのむ音が聞こえる。これから起こりうることを考え、決意を固めているのだろうか。ここ全体の空気は真剣そのものだ。

「君らにはこれから、ヴィラン組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦をしてもらう。」

彼は私たちにそう課題を提示する。屋内戦ねえ．．．ヴィランが側とヒーロー側で使うことのできる魔法と量が違ってくる。どちらもなるべく慎重に行わなければならないわね。それに2対2ならばチームワークも必要となってくる．．．

「基礎訓練も無しで？」

「その基礎を知る為の実戦さ。ただし、今度はぶっ壊せばOKなロボットじゃないのがミソさ。」

彼はそうにこやかに答える。今回は対人戦。ヒーロー側は少なくともヴィランを捕縛しなければならぬ。力加減はまあ何とかなるわね。問題はその勝敗について、また制限時間についてなのだけれど。

「勝敗のシステムはどうなります？」

「ぶっ飛ばしても良いんですか？」

「また、相澤先生みたいな除籍とかあるんですか？」

「分かれるとはどのような分かれ方をすれば良いんですか？」

「んん〜！聖徳太子!!」

オールマイトの話が一段落すると一気に喋りだす数名。・・・というかそれを今から話すんじゃないかしら？

「状況設定は、ヴィランがアジトのどこかに核兵器を隠していてヒーローは、それを処理しようとしている。」

手のひらサイズのノートを取り出し話し始める。

「(カンペ。。。)」

「ヒーローは、時間内にヴィランを捕まえるかそれを回収する事。ヴィランは、制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえる事。」

コンビおよび対戦相手はクジだ!!」

と、カンペを見つつ若干汗をかきながらも謎の言い切ったという雰囲気放っている表情とともに黄色いクジの箱を取り出した。・・・なんか締まらないわねえ。設定はいかにもアメリカン。現実味を帯びていないように思えるけれど、核兵器というものはそれだけで嚴重でないといけない。・・・いつも試験管の保護に使っている魔法なら大丈夫かしら？

そんなことを考えている間にくじは引かれる。結果、チームは

Aチーム？緑谷出久、麗日お茶子

B チーム？ 障子目蔵、轟焦凍

C チーム？ 峰田実、八百万百

D チーム？ 爆豪勝己、飯田天哉

E チーム？ 芦戸三奈、青山優雅

F チーム？ 口田甲司、砂藤力道

G チーム？ 上鳴電気、耳郎響香

H チーム？ 蛙吹梅雨、常闇踏陰

I チーム？ 葉隠透、尾白猿尾

J チーム？ 瀬呂範太、切島鋭児郎

となった。何人かがペア同士で顔を確認しあう。初対面が多い中どうチームワークをとっていくのかしら？・・・て、あら？となると、二人組の中で余った私はどういう扱いになるのかしら？

「先生！ノーレッツジさんの振り分けはどうするのですか。」

「この振り分けだと一人余ってしまうだろう？だからこれら一通りの演習を終えたのち、彼女には二つくじを引いてもらう。一つは彼女の対戦相手のチーム。もう一つは彼女とペアになる人物一人だ。」

八百万の質問にオールマイトはそう答えた。成程、それだったら全員演習をすること

ができるわね。・・・ということ

「ですが、彼女は一度演習を見てからするのでしょう？それでは不公平ではありませんか？」

「うむむ・・・そうだね。どうしようか・・・」

「・・・って、そこまで考えておいて、これについては考えていなかったの？幸先不安になつてきたわ。」

「私だけ別室で、後から講評を聞けばよいのでは？」

「・・・うん、そうだね。そうしよう！」

オールマイトがニツと笑つてそう言う。まあ、別室ならばだれにも邪魔されずに本を読むことができるからなのだけだね。

「最初の対戦相手は、こいつらだ！」

そう言つてオールマイトが上げたカラーボールには、AとDの文字。

「Aコンビがヒーロー！Dコンビがヴィランだ！他の者は、モニタールームへ向かつてくれ！ノーレツジ少女はその隣の部屋で待機だ！」

「「「はい!!」」」

A、Dチーム以外が、モニタールームへ歩き始めた。私はその隣である別室へと移動をする。

く少女移動中く

コンコン・・・

「・・・あら？もう全員終わったのかしら？」

私はノックに小さく返事をした後読んでいた本を袋にしまつて立ち上がり、隣のモニタールームへと向かう。

モニタールームにはもうほとんどの生徒がいた。あら？出久はどうしたのかしら？

「・・・まさか、保健室？」

「さあノーレッツジ少女！くじを引いてくれ！」

私はくじに手をつ突っ込み、カラーボールを引き抜き、そこに書いてある文字を確認する。

「・・・B」

「!？」

「・・・」

そのポツリと零した言葉にそのチームである二人・・・障子と轟が反応する。この二人は少し厄介かもしれないわね・・・特に推薦入試で入ってきた轟は。個性の使いようによつては結構立ち回り方も変わってくるし。

私は作戦を考えながらも一つ一つのくじを引く。

「……………麗日お茶子。」

「……………ウチ!?!」

ペアとなったのはお茶子だった。肝心の彼女には緊張と少しの不安が伺える。…………

彼女の個性は確か無重力だゼログラビティったかしら?となると…………

……あの魔法を使ってみましょう。

「続いてチームを決めさせてもらおう!」

そう言つて彼が取り出したのはさきほどのくじ箱。そして彼はボールを中に入れ、混ぜる。そして、くじを引き抜く。

「…………Bチームがヒーロー!Kチームがヴィランだ!」

…………よし。ヴィランチームなら構図が把握できるから結構有利な立ち位置ね。準備中に魔法のトラップと、麗日との作戦会議をしていきましょう。

side:轟焦凍

…………ノーレッジか。

俺は相手チームである彼女についてのことを思い出す。

(…………個性把握テストで使っていたあの色々な技。

授業での部分も含めて相当頭が回る。一筋縄ではいかないだろう。それに全員の中

で一番個性についての謎の多い。どんな技を仕掛けてくるかわからないから先程使った技は使うべきではないな。

油断を誘ってから捕獲するか・・・？いや、一人が引き付けてもう一人が核に触れるほうが勝率が高い。」

「・・・どうする轟。」

「・・・。どちらかがノーレッジを引き付け、もう一人が麗日を避けて核に触れる。恐らくこれが一番勝率が高い。」

「・・・二人で一人ずつ仕留めたほうが安全じゃないか？」

「むしろ二人で挑んでどっちも捕まるほうがマズイ。だから別行動にしたいと思う。」

「・・・分かった。」

・・・さて、アイツはどう出てくる。

『両チーム準備は良いかな？それでは！BチームKチームによる、屋内対人戦闘訓練スタート！』

オールマイトから開始の合図がでた。俺はまず障子に中がどうなっているのかを聞く。

「・・・・・・？」

「・・・・・・どうした？」

「おかしい。足音も会話も……音が一切聞こえない。」

「……は？」

ちよつと待て。あいつは確かに空を飛んだり、麗日もものを浮かすことができるから足音が聞こえないというのは想定していた。だが、音自体が聞こえないというのは想定外だ。

……中の情報を極力知られないつもりか。なら、

「……中に入ってから確認するぞ。」

「……分かった。」

俺たちは中に入る。

「!？」

「何だ……これは……!？」

……そこにあつたのは、石造りの壁にある一つのドアだった。床もどこか柔らかい。

おかしい。こんな構造ではなかったはずだ。いったいなぜ・

『——ヒーローのお二方、ごきげんよう』

突然、この空間に無感情な声が響く。この声は恐らくノーレッジのものだろう。

「……おい、(ハハ)はどいだ。」

『どいつて……そりゃあビルの中よ。』

「……そうか。」

俺は驚きで止まりかけている脳みそを回転させ、冷静に分析するようにする。……となる、構造ごと変えたのか。どこまで出来るんだ、あの個性は。

『ここにあるドアは最上階への道です。核に触れたいたのであればお進みください。』

そう言った瞬間、入ってきた入り口が閉まる。驚いて入り口の側にいた障子が開けようとする……。が、押しても引いても開かない。

「……分散はさせたくないのか。仕方ない、ここは進むしかなさそうだ。」
俺は扉を開け、恐る恐る中を伺ってみる。

ガチャ……

——ドアを開けたと同時に少し身震いするような冷気が飛び込んでくる。

元のビルとは大差ないつくりではあるが、足元には赤いカーペットのようなものが敷かれています。天井を見上げると何か小さな石のようなものが浮かんでいる。恐らく麗日の個性だろう。今回の演習ではあれを落としてくるのだろうか。——にし
ても、何でこんなに肌寒いんだ？

「障子、全体の確認を頼む。」

「分かった。」

俺は障子にそう言った後、上の石を全て覆い隠すように、天井全体を凍らせる。……まあ、これで大丈夫だろう。俺は先へと歩を進める。目指すはあの奥にある扉……

「あらあら……そっちへ行かれると少し困るの。退いてもらえないかしら？」

……が、突然聞こえてきた無感情な声に咄嗟に足を止め、勢いよく振り返る。

——そこには、開いた本を手にとって立っているノーレッジがいた。……一体、いつの間に来やがったんだ？俺の後ろには障子が居たはずだ。どうやって……

……障子？

そうだ、さっきまで障子は居たはずだ。だが今は一切声が聞こえない。襲われたのであれば声がするはず、だったらなぜ……

「ああ、たしか障子……だったかしら？いまは麗日と戦っているわ。」

「……!？」

そう言うノーレッジの顔にはまったく表情が見えない。だからこそ俺は室温と個性の使用で震えはしないものの動きが鈍ってきた体を動かし、距離をとる。

そして、アイツの足を狙って氷結攻撃を放つ。

「おっとと、危ない危ない。」

……が、アイツは宙に浮かんでそれを軽々と避ける。俺は飛べることをもう知って

いたため、ノーレッジが避けた方向にある壁から先程のもの以上の速度で氷を出す。

「……!?!」

さすがにこれは予想外だったらしく、腕が凍るのを見て目を少し見開いている。

「こんどこそ、捕らえた」と確信した俺はじつとしてろと言つてから確保テープを片手に近づく。

「——もう少し長引くと思つたのだけれど。」

ため息をついてつまらなさそうにノーレッジは顔を伏せる。俺はそれに何も返さず、歩いてその腕にテープを巻きつけようと……

「……一つ忠告しておくわ、ヒーローさん。」

顔を伏せたまま彼女はそう言う。その表情は何うことができない。

「……敵を確保するとき、最優先にすることは仲間との連携。それと……」
彼女は顔を上げる。その目線は俺を……

「……周囲確認よ。」

……否、俺の背後を見ていた。

その言葉を聞いて初めて俺はそれに気づき、咄嗟に振り返ろうとする……
が、

「あなた、個性の使用に伴うデメリットを把握すべきだったわね。一瞬で振り返るのはいい判断だったけれど、少しだけ遅かったわ。」

「……俺が体を回転させようとして軸にした脚は、踏み込むべき地面に着くことがなく宙へと浮かんでいた。少し口角を上げ、微笑みながら、俺の後ろにいるだろう人物にヤツは話しかける。」

「……ナイスタイミングよ、お茶子。」

『ヴィランチーム、WIN!!』

視界に映るのは確保テープ。オールマイトが高らかに相手の勝利を宣言するが、俺はその中、ただただ呆然としていた。

戦闘訓練と動き出す闇

side：パチユリー・ノーレッジ

先程演習が終わって私はモニタールームにいる。轟は軽度の低体温症になっているから熱魔法をかけたローブでじわじわ温度を上げていく形で温めている。

「お疲れ様、君たち。」

「……あれってどんなものだったんですか？さっぱり読めませんでした。」

「もちろん説明！……と言いたいことなんだけど、こちらから見てもさっぱりなんだ。説明お願いできるかい？ノーレッジ少女。」

「……分かりました。」

時は遡って訓練前。

私はお茶子と作戦会議をしていた。

「うーん、ヴィラン側になるのは初めてやなあ。何か仕掛けたりするけど、うちにはそういうことさっぱりなんよなあ。」

「……うーん。」

「……轟か。恐らく氷と熱系の個性。だけど氷しか使っていないって聞いているか

ら使ってくるのは氷結による捕縛……となるとこちらの居場所を知られたらマズイ。つまりは内部の情報を知られなければいい。さらに障子。彼は腕を増やして器官を複製する個性。そうなるにつれて音を大きく感じられるのだから鼓膜を揺さぶるのがいいんでしょうけど、下手にやるのは危険だし何より演習にならない。

だったら防音結界を張って探られないようにしましょう。こちらの勝利条件を達成する前提条件は「相手をこちらの土俵に引きずり込むこと」。あちらが外から捕縛するにはこちらの居場所の把握が必要。防音結界なら都合がいい。

……喘息にならないのはいいけれど、少し魔法力が落ちたのよねえ。インターバルとか。そのために道具があるのだけれど。

まあそのことは置いておいて、

「まずはこちらの居場所を把握されないようにしましょう。」

「どうやって?」

「私の個性なら何とかなるわ。」

「……パチエちゃんがやるんやったらウチがやる意味あるんかな?」

「そこでなんだけど……」

私はお茶子に先程思いついた作戦の概要を説明する。お茶子は真剣にそれを聞き、頷いた。

．．．．．さて、始めましょう。私は用意に取り掛かった。

『両チーム準備は良いかな？それでは！BチームKチームによる、屋内対人戦闘訓練スタート！』

オールマイトから開始の合図がでた。私たちは所定の位置に着く。私は三階、お茶子は二階だ。

私は一階、外に配置した監視用の水晶で様子を見る。

『．．．．．？』

『．．．．．どうした？』

『おかしい。足音も会話も．．．．．〈音が一切聞こえない〉。』

『．．．．．は？』

動揺しているのが分かる。

『．．．．．中に入ってから確認するぞ。』

『．．．．．分かった。』

よし、これで第一の条件はクリア。

『!?!』

『何だ．．．これは．．．!?!』

人間は予想外のことが起こると動揺し、恐怖する。すると憶測だけに縛られ行動に支

障が出てくる。……まあ、そううまくはいかないわよね。相手は予想以上に冷静だ。

私は予定通りにスピーカーもどきで声を響かせる。

「——ヒーローのお二方、ごきげんよう」

私はできるだけ無感情に声を伝える。感情を出してしまつては探られやすくなるからダメだ。相手はその声に反応し、見まわす。そこに私がいないと気付くと静かな声で問いかけてくる。

『……おい、ここはどこだ。』

「どつて……そりゃあビルの中よ。」

『……そうか。』

冷静になろうとするのはいいけれど結構顔に現れているように見えるわね。

「ここにあるドアは最上階への道です。核に触れたいのであればお進みください。」

私はそう言つてちよつとした仕掛けを施してある扉を閉める。驚いた障子は押し下り引いたりして開けようとしているが、これを開けるには少し頭を使う必要がある。

『……分散はさせたくないのか。仕方ない、ここは進むしかなさそうだ。』

轟たちが扉を開け、入っていく。

『障子、全体の確認を頼む。』

『分かった。』

轟は障子にそう言った後、上の石を全て覆い隠すように、轟個性で天井全体を凍らせる。私は疑似サーモグラフィを通して轟を見る。・・・よし、体温が下がってきている。この差分からすると・・・大体熱の感知がマヒしてきたぐらいかしら？

轟が歩き出したところで私は防音結界を作動させ、お茶子に指示を出す。

「お茶子、解除して。」

「分かった。」

解除すると障子の足元から床が無くなる。突如足場をなくしてしまった障子は声を出すが、それは聞こえない。あの部屋にいる時点で轟の通信機器は作動しないようになっていた。ちよつとしたジャミングだ。

「終わったよ！」

「分かったわ。扉を使ってこつちに来て頂戴。」

「了解！」

轟がいるのは二階ではなく三階。障子は二階にある拘束具で拘束されているから捕獲テープを巻き付けるのは簡単だろう。さて、私も動きましよう。私は透明化魔法を解き、轟に話しかける。奇襲でもよいのだが、ヴィランとするならば動揺するさまを楽しむようにしたほうが良いだろう。

「あらあら……そっちへ行かれると少し困るの。退いてもらえないかしら？」

当然聞こえた私の声に彼は勢いよく振り向き、動揺する。

「ああ、たしか障子……だったかしら？いまは麗日と戦っているわ。」

「……!？」

私が「捕縛した」ではなく「戦っている」と言ったのには意味がある。交戦中であると知れば相手は速やかに決着を着けに来る。しかもすぐに仲間が来るとは思わない。通信機器を試す余裕が見られないところとそして戦慄が収まってきたところを見ると、恐らくこちら一点に集中してくるため比較的視野が狭まってくるだろう。

「おつとと、危ない危ない。」

私は空中浮遊をしてそれを避ける。この攻撃は事前に足元の温度が下がってくるため分かりやすい。恐らく彼はこれを見越してもう一手仕掛けてくるだろう。避けようかと思っただが、後ろに映る人影を見てやめた。

「……!？」

私はその攻撃に驚いたように見せる。「捕らえた」と確信しただろう彼はじつとしてると言ってから確保テープを片手に近づいてくる。それに合わせて彼女もこちらへと近づいてくる。

「——もう少し長引くと思ったのだけれど。」

私はため息をついてつまらなそうに顔を伏せる。彼はそれに何も返さず、歩いてその腕にテープを巻きつけようとする。私は口を開く。

「……一つ忠告しておくわ、ヒーローさん。……敵を確保するとき、最優先にすることは仲間との連携。それと……」

私は顔を上げ、彼の後ろに居るお茶子を見る。

「……周囲確認よ。」

彼はその言葉の意味に気づき、初めて振り返る。私はその間に氷結を解除し、立ち上がる。

「あなた、個性の使用に伴うデメリットを把握すべきだったわね。一瞬で振り返るのはいい判断だったけれど、少しだけ遅かったわ。」

彼の反射神経は良かったのだが、少し周りに無頓着すぎる。宙に浮かび、身動きが取れないのを確認してから私はお茶子へと話しかける。

「……ナイスタイミングよ、お茶子。」

『ヴィランチーム、WIN!!!』

私たちは勝利した。

くく

「……と、というのが大まかな概要よ。」

私がそう話すと、周囲に静寂が訪れる。・・・何でそんなに驚いているのかしら？

「・・・今回のMVPは彼女だ。何故だかわかる人！」

「はい！ノーレッツジさんは相手の個性のデメリット、仕掛け、心理傾向を考え、そしてチームワークもとっています。ですが、作戦が成功しなかった場合はどのようにするおつもりで？」

「成功しなかった場合は即座に撤退。移動して最上階で核の保護、及び階段の封鎖をしてタイムアウトを待つつもりだったわ。」

「・・・もとからクリアさせるつもりは無かった・・・と。」

「クリアはできるわ。」

「え？」

私の言葉に八百万達は驚く。クリアすることは不可能ではない。

「私たちが拘束するか、あの最初の扉を開けて核にタッチしたらクリアよ。」

「・・・最初の扉って開けられねえんじやなかったっけ？」

「襖みたいにスライドしたら開くわ。」

「いやいや思いつく奴いねえから！思いついたらおかしいから！」

まあクリアさせるつもりはないが、これでも難易度は低めだ。核の周りに結界を張ってその中に私たちが入ってクリアを不可能にするとか初めから入れなくするよりはマ

シ。

——この少女、思っていることがおかしい。

くく

教室に帰るやいなや質問攻めにあつたが、それを抜け出して私は保健室へと向かった。

「失礼します。」

「・・・!?つああ、ノーレッジ少女か。どうしたんだい？」

「出久の調子を見に来たのと、ちよつとした用事です。」

私は出久の元へと向かう。

「・・・はあ、また個性使つて無理したでしょう。」

「・・・うん。」

やつぱりこうだったか・・・はあ。なぜここまで無理するのかしら？

「救助する人間が救助されてどうするのよ、オールマイトの後継者さん。」

「・・・え？ノーレッジ少女、君がなぜそれを・・・」

「・・・あ、僕から説明した・・・というか、個性把握テストの次の日に聞かれたんです。」

「そうか。」

……って、まだ説明していなかったの？面倒なことになって広まらないうちでよかったです。そう思っている中、出久が口を開く。

「どうしたらいいのかな？個性を使ったらどうしてもこうなっちゃうし……」

「……ヒントは勝己よ。」

「……かつちゃん？それはどういう……自分で考えなさい。」……はい。」

私はそう言い残した後、帰路に着く。

三人称 side

——とあるバーのような場所で。

その席には怪しげな雰囲気のある男が座っていた。男はくつくつと笑いながらシャンパングラスの中身をぐるぐると回す。

「……どうかされましたか、タペートさん。」

「ククク、いえ、とても愉しいことを思い出していただけですよ。ククッ！」

黒くモヤモヤとした男はその男の様子を見て、そうですかと言った後とある人物を待つ。

「……相変わらずムカつくなあ、お前。」

「おやまあひどいですね弔さん、ほら、そんな顔をせず、につこりと！」

「ウゼエ。」

男はその巾と呼ばれた手の様なものを顔に着けた男にそう返す。二人の表情は相対的だ。

「……こんなんで大丈夫か？」

どこか苛立ちながら男は言う。目の前にやけ顔の彼を睨みつけながら。

『彼は優秀な人材だから心配は無用さ。』

「先生!」「!?」「おやおや。」

突然テレビの画面が映り、音声が発せられる。

『それよりもアーリン君、明日のことについて任せても大丈夫かい?』

「ええ!」

男は姿勢を正し、その表情に気づかれない愉悦と狂気をにじませながら言う。

「私、Arilyn・Taphetoにお任せくださいな。」

——二つの歯車は廻り続ける。噛み合わさるまであと少し。

To be continued...

委員長決めと事件の足音

side：パチユリー

いつもよりも遅く学校に来た私は、校門にいるそれらを見て「はあ。」とため息をついた。

「オールマイトの授業での様子は！」

がやがやと校門の前で騒ぐマスコミ達。どうやら無差別に生徒に聞いて回っているらしい。

そのほとんどの生徒は迷惑がったり、素直に答えたりと様々。

だが私はああいう幻想郷の文屋が集まったようなものは正直大嫌い。一人でも相手にするのがめんどくさい上にしつこい。しかも一部は誇張表現が多いしかもから関わりたくもない。

だから私はなるべく感づかれないように……

「あつ、パチエちゃん！」

……したかった。

その聞き覚えのある声とともに、マスコミ達の視線はこちらに集中する。

元凶である男はこちらに向かつて微笑む。が、私の表情を見た瞬間、彼は見る見るうちにその笑顔が青ざめていく。

ああ、そう。

私はその方向を見て微笑む。

(後悔するくらいだったら何で考えもせずにごつちに話しかけたのかしらあの幼馴染^{馬鹿}は。)

内心そう毒づきながら。

そうしていると何故かこちらに視線を向けていたマスコミはこちらから目を背け、他の生徒に話しかけ始めた。

まあ、不本意だけど私から目をそらさせることが出来たからよしとしましょう。

私は校舎へと歩を進めた。

「君、よつぽどマスコミが嫌いなんだね。」

突然、横方向から声がかかる。その方向を向いてみると、二つの黒い三角のもようのはいったオレンジ髪で、手には青白い炎の灯った昔ながらのランタンを持ったなんとも不思議な男がいた。目元まで髪がかかかっていてどんな感情かは読み取ることが出来ないが、その口元に浮かべた笑みが彼が楽しんでいる、あるいは興味を持っていることが

伺える。

「そうよ。」

「そうかー。なんか君不思議だねえ。雰囲気が。」

「唐突ね。でも、あなたに言われたくないわ。」

「キヒヒつ、まあそうだね。」

あつ、僕は瓜灯幽鬼^{かとうゆうき}。クラスはI―B組。君は？」

彼はニツと笑う。ふむ、I―Bか。確かヒーロー科はA組とB組の二つだったかしら。となるとつまり、彼もそれに相当する個性、あるいは素質を持っているということ……なるほど。

「パチュリー・ノーレッジ。」

パチュリーがファーストネームでノーレッジがファミリーネーム。クラスはI―A組。」

「へえー！君もヒーロー科なんだね！」

髪の毛の間から見えた赤い目が光る。同時に、彼に共鳴するように炎が勢いよく揺らめいた気がした。

すこし注目してみると、灯っている青白い炎からは少しの靈気が感じられる。少なくとも普通の炎ではないでしょうね。

だとすると見た目とかもそうだけど、ジャック・オー・ランタンのようなもののかしら？ ヒーロー科に入っているのであればあり得えない話ではないわ。

「……つとと、僕はこっちだから。じゃーねえノーレッジさん。」

彼はそう言つて手を振ると、前を向いて奥のほうへと歩を進めていった。

それを見送つた後、私はドアを開ける。

こちらに挨拶をしてくるクラスメートに小さく挨拶を返し、私は席についていつも通り本を開いた。

「昨日の戦闘訓練お疲れ様。Vと成績、見させてもらった。」

「爆豪、お前もうガキみてえな真似するな。能力は備わつてんだから。」

「……分かつてる」

勝己はうつむいたままポツリと言う。オールマイトから聞いているのと合わせて大体予想は付くけれど、やっぱりあの事件以来多少の改善はされたけど裏切られたついでう気持ちがあるのかしらねえ……

「で、緑谷はまた腕壊して一件落着か……個性の制御、いつまでも出来ないから仕方ない。じゃ通させねえぞ。俺は同じ事を言うのが嫌いだ。それさえクリアできればやれ

ることは多い、焦れよ緑谷。」

「…はい！」

出久は決意したようにはつきりとそう答える。苦勞したからこそ優しいこと言うのね。さすが教師。

「さて、ホームルームの本題だ。急で悪いが君たちには……学級委員長を決めてもらう。」

「「学校つばいのキターー！」」

(うわあ……一番やりたくない仕事があった。)

学級委員は中学だと押し付け合いみたくなっていたけど、この生徒は責任感か、それとも他を率いるという経験をしたいのか、意欲的なのが多い。私からしてみれば、学級委員は先生から厄介ごとと任されたり、何よりも本を読む時間が減るから嫌だ。

まあ、立候補しなければいい話。私は傍観に徹しましょう。

「委員長！やりたいっすそれ俺！」

「うちもやりたいです！」

「僕の為にあるやつ☆」

「オイラのマニフェストは女子全員膝上30cm！」

「リーダー！やるやる！」

よくもまあやろうと思えるわねえ。……中には任せたくない連中も入っているけど。

「静粛にしたまえ！」

他を牽引する責任重大な仕事だぞ！やりたい者がやれるものではないだろう！周囲からの信頼あつてこそ務まる制度！民主主義にのっとり、真のリーダーをみんなで決めると言うのなら、ここは投票にて決めるべき議案!!」

収拾がつかなくなってきたところに、飯田の一声が教室内に響く。その声でこの場はびしやりと静かになり、皆が飯田を見る。私も一瞬さすがと思つて顔を上げたが、その様子を見て呆れた。

『腕そびえ立つてんじやねーか!』

(説得力に欠けるわねえ。)

飯田の手は天井に向かってピンと真つすぐに上がっていた。自分で言っておきながら同じことをするというのは流石ね。おかげで不満の音がクラスの中から上がつていすぎて賑やかだわ。

まあ、指揮系統ならば彼が向いている……けれど、キツチリとしすぎているのがあまりよろしくない。

「どうでしょうか先生!!」

「時間内に決めりや何でも良いよ。」

「ありがとうございます!!」

先生はそう言うともどもぞと寝袋の中に潜り込む。いつもの寝不足解消だろう。

そして今、許可を取った飯田の指揮で投票が始まった。

最初ルールを決めなければ普通皆がみんな自分の所に入れると思うから決まるかは半信半疑だった。が

結果は、緑谷4票・八百万3票。

票を他人に入れた者が意外と多かった。

「な!?入ってる!誰かが入れてくれたのか!?!」

目を見開いて言葉をこぼす飯田。どうやら他に入れていたらしい。

ちなみに私は八百万に入れている。…ていうか、なんで出久にあんなに投票が入っているのかしら?

私は言葉が飛び交う中、記入されているクラスメイトの票数を確認する。視線を右から左へと移す中、とある部分に目がいった。なぜかと少し驚きはしたが

「…へえ、なるほど。」

すぐに合点がいった。まあ、彼が入れた理由は大体想像がつく。

(本当、アイツも変わったわねえ……)

私は0票の彼を見ながらクスリと笑った。

——時刻は変わって昼食の時間

私は今、教室で苦手であった魔法薬についての資料を読み、頭の中に詰め込んでいた。この教室には弁当を持ってきている勝己と、同じように弁当を持ってきているのがちががやがやと騒いでいるのが聞こえてくる。けれどもここは高等教育の最高峰である雄英。ただマスコミが騒いでいるくらいじゃあセキユリティを超えることは出来ない。(尤も、相手が個性を使つて破壊しない限りは。)

心の中の呟きに一人で「そうね」と自答する。葉を挟み、そつと本を閉じる。いつものように立ち上がり、先程の呟きに同意を求めるように正門のほうをチラリと覗き見る。

——だが、正門はガラガラと中心よりも下の方から崩壊していた。

「——えっ？」

『セキュリティー3が突破されました。生徒の皆さんは屋外に避難してください。』

途端、焦らせるように鳴り響く警鐘。それは、最高峰である雄英のセキュリティーが破られたことを知らせた。

「侵入者!？」

「避難しないと……!」

「落ち着いて、あれはただのマスコミよ。」

『!?!』

避難をしようと焦る数人に窓から目を背けず私はそう告げた。現に今マスコミがカメラ等を持つて押し寄せ、イレイザーヘッドとプレゼントマイクが応対をしている。それを聞きほつと胸を撫で下ろすのが数人、「クソが」と小さく吐き捨てたのが一人。各々が席へと戻っていく。

——疑問に思っている奴はあんまりいなわねえ。大体、ただのマスコミが個性犯罪をしてまで取材に赴くだなんてよっぼどのがない限りありえないでしょうに。

私は教室に残っているクラスメイトを見て少しあきれながらそう心の中で呟く。

もう一度窓から正門を覗いてみるが、先程見かけた怪しい人物はもう姿を眩ませている。た。

(二体、何だったのかしら。)

あの紛れていた奴は取材道具などを持ち歩いている様子も無かったし、取材をするのであればフードで目元を隠すだなんてことをしない。それに崩壊したときに手を壁に向かつて伸ばしていたから十中八九何らかの個性は使っている。

何よりもそのあとの行動が不自然だ。他の記者が崩れた壁から突入しているのに対し、そいつだけ動かないでいた。ならば何故セキュリティーを、それも雄英高校のセキュリティーを破るだなんて真似をしたのか。

(愉快犯のヴィランか、それとも破ること自体に何か意味が……)

……いえ、今考えるのはやめておきましょう。

ふと視線を上げた先の時計の針は先程よりも進んでいた。気が付けばもうすぐ授業が始まる時間だった。

「……? パチエちゃん、どうかした?」

「なんでもないわ。」

幼馴染の言葉に私は少し強く答えた。そのせいか、彼は「そう……。」と言うもの、いささか怪しんでいるような顔をしてジッとこちらを見つめる。数秒だったが何かを察したのだろう。すぐに机へと向き直った。

……まったく、腐れ縁なのも考え物ね。

予鈴が鳴る。聞こえた先生たちの足音は、いつもより重く感じた。

その後の授業は先程の騒ぎなど無かったかのようにつつがなく終了したが、

（うん、無い。無いわ。）

私は幼馴染の発言に対して身勝手かもしれないがそう思った。

「というわけで、委員長は飯田君にやってもらうことにします。」

「ぼ、俺?！」

このやり取り自体には問題は無い。私を感じているのはもつと別だ。

うん、まあ、百歩譲って辞退するのはいいとして、

「え、えっと、全力でやらせて頂きます!」

（何故飯田と八百万に何も言わずに実行したのよ。）

困惑する二人と、真剣な表情で言う幼馴染を交互に見て、私は呆れた。

「パチエちゃん、帰ろ」残らなきやならない用事が出来たから今日は無理。…分かった。お茶子は残念そうに言った。さすがに何なのかという詮索はしてこない。

「んじや、先デク君たちと帰る。バイバーイ。」

手を振りながらこちらへと向ける明るい声と笑顔は遠ざかりながらドアの向こうへと消えた。

さて、用事をさつさと済ませましょう。

「先生、今少しお時間よろしいでしょうか？」

「…何だ？」

ドアに手をかけていた先生は動きを止め、顔だけこちらへと向ける。

「悪いがもうすぐ職員会議がある。用があんなら後に「さつきの」…あ？」

「先程のマスコミ騒動について、報告しなければならぬことがあります。」

反応といい、さつきの騒動で何か話し合いがされたのは想像がつく。彼らも教師とは

いえど、プロヒーロー”。

「…ついて来い。」

「はぐ。」

先程のそれが何を意味しているのかの検討は付いているだろう。

たとえそれが信じがたい事であろうと。

To be continued…

U S J 編

U S J 編～前編～

side：パチユリー

マスコミ騒動の翌日、再びヒーロー基礎学の時間がやってきた。

「今日のヒーロー基礎学だが、俺とオールマイト、そしてもう1人の3人体制で見ることになった。」

昨日のことがあったからか、今回は流石に人数を増やしている。三人体制の中にオールマイトを入れたのは少し心配だ。

何せ今の彼のマッスルフォームでの活動時間は短くなってきた。それに加えて彼のことだから出勤時にも何か事件が起こればすぐに向かっっていくだろう。それだけに負担を抱えていたら治るところか力の衰えに加えて活動時間のさらなる減少が発生する。恐らく彼が引退するまでの時間も残り少ないだろう。

もし、先日の様なことがエスカレートしたら？もし、そこで彼が倒れたら？

もし、平和の象徴サインが無くなったなら、社会はどうなるのかしら？

(…少なくとも、こちらの異変の犯人捜しどころじゃなくなってくるでしょうね。)

混乱に乗じて “こちら” に悪いものが来たらマズイ。こちらの事件をまずひと段落付けてから犯人捜しを始めましょう。

「何するんですか？」

「災難水難何でもござれ。救助訓練だ。」

そう言つて先生は “RESCUE” と書かれたプレートを取り出す。

「レスキューかあ。今回も大変そう」

「バッカお前これこそヒーローの本分だぜ！鳴るぜ腕が！」

ヒーローという職業はヴァイランとの戦闘が目立つが、“人を助ける”のが主な目的のため救助なども仕事の一つ。忘れられがちではあるけれど、人命がかかっている分こちらの方がむしろ重要なこと。一部例外を除いてサポートや治療系統の個性のヒーローの独断場であり、またパワー系の個性も力仕事の方面で活躍のできる仕事…でも、それだけ救助というものは幅が広い。頭脳と力量、そして柔軟性が求められる仕事。

「今回、コスチュームの着用は各自の判断で構わない。中には活動を限定する物もあるだろうからな。」

コスチュームは個性でも届かない範囲を少しでもカバーしたり、自らの個性を伸ばす

ための物。救助であれば自分の個性を最大限に活用するのが一番。だけど、それ故に活動が限定されてかえって狭まってしまふものがある。だから一部にとって使いどころが難しいのよねえ。

「訓練所は少し離れた場所にあるからバスに乗って行く。以上、準備開始！」

敷地内をバスで移動しなければならぬレベル……試験の時にも思ってたけれど

この学校些か広すぎじゃないかしら？さすがは国立高校といったところね。

いつもの様に先生の言葉にすぐ反応し、着替えのために移動するクラスメイト達。彼らの表情の中には期待、緊張、不安があった。

私の中にある感情は何なのだろうか？

期待？私はやるべきことを行っただけ。救助は臨機応変さが試される。その場の判断一つが命とり。それに期待はあまりしていない。

緊張？確かに昨日のこととこいしの情報のことがあつて警戒はしているが、さすがに警備体制が高まっている中で潜入するほど彼らは馬鹿では無いでしょう。

不安？不安……このまま私がこの道に進んでいいのか。そんなことを何度も思うことはあつた。けれども紫やアリスにも『相手のことを探るのならば、ヒーロー側にいたほうがいい。』と言われている。きっかけがあの日のことだったとしても、この判断は良かったのか。この先どうなっていくのか……。

けれども、これは救助訓練とはまた違う。それに当てはめるのであれば不安でもないだろう。

じゃあ――

「……ちゃん、パチエちゃん！」

「――っ！」

俯いた顔を上げると目の前にお茶子の顔があつた。どこか驚いた様子で、そのぱっちりとした目が少し見開かれている。……顔にでてしまったのかしら？

「どしたん？なんか考え事？でもはよ移動せんと怒られるよ。」

「……そうね。ありがとうお茶子。」

少し声が上がってしまつた。不審がられるだろうか？

お茶子は首をコテンと傾げ、「そっか。」と言ひ、少し振り返つてから彼女は歩き出す。

……なにも詮索は無し、か。有り難いわね。

立ち止まつた足を動かし、私はお茶子とともに更衣室へと向かつた。

……今日という日に、少しの引つ掛かりを感じながら。

◇◆

●○●

第三者視点

一行を乗せ、バスは訓練所へと向かう。

その行きの中のバスの中は喋り声や暖かな雰囲気で満ち満ちていた。少しづつ交流が深まって互いに興味も出てきたところ。彼らが会話に花を咲かせるのはごく自然のことだ。

しかし彼女——パチュリー・ノーレッジはそこに混ざらず視線を輝く目ではなく本に落とし、目に映る小さな文字の羅列をじつくりと追っている。

今の彼女にとって会話よりも自分ののファミリーネームであるノーレッジ知識の通り、新たな知識で見聞を広めることと、今持つ知識を更に深めてパズルの様に組み合わせる方が重要なのだ。

尤も。彼女が会話行動を嫌っているというわけではない。昔から時間を忘れて研究や本を読むことに勤しんでいたため染みついたある種の習慣ルーティーンなのだ。

とはいえ、それは彼女が話しかけられない前提のことだが。

「やっぱ！派手で強いかったら、ノーレッジと轟と爆豪だよな！」

そんな大きな声を上げたのは切島だ。個性把握テストや戦闘訓練にて個性を知る機会が増えたためか、やはり群を抜いて目立つ個性を持つ彼らに話題は広がった。氷、爆発、魔法。実際に影響を及ぼす、或いは出現させる発動型の個性の中でも「良個性」

に分類される彼らの個性は、見た目の派手さはトップクラスの物だ。

“ヒーロー向き”だと世間ではよく謳われる。

(…だから他者とのレベルの違いを早くから認識して、すこしばかり自分を大きく見る傾向があるのかしら。)

大人たちの言葉は子供に深く根差す。子供に大きく影響を及ぼす“すごい”の言葉。

自分自身を見られないということに気づくには時間がかかる。…無論、ここにいるほとんどの者は自覚している。

「爆豪ちゃんはキレてばかりだから人気出ないと思うわ。」

「んだとコラー！出すわ!!」

「ほら。」

幼馴染の囁みつく声を聞いてため息をついた少女は読書するのを一旦やめてゆるりと前を見る。見てみれば案の定、爆発したような髪が印象的な彼——爆豪勝己がこれでもかというくらい目を吊り上げらせ、鎖につながれた獣の様に言葉で威嚇していた。火をつけたら今にも爆発しそうで・・

「この付き合いの浅さでクソを下水で煮込んだような性格と認識されてるってすげえよ。」

「てめえのそのボキャブラリーは何だこの殺すぞ!？」

「……いや、常時爆発しているといった方が正しいだろう。彼の形相は鬼の様ではあるが、イジラれキヤラとして定着しつつあるその発言はたいして意味をなさない。どころか、彼等のノリは火に油を注いだように勢いを増していく。」

すぐに嘯みつくのだからイジラれるのだというのに。

そんな様子を見た彼女は、本を閉じてポツリと言葉を漏らす。

「……確かに的を得ているわね。」

「ああ、!? どういう意味だよ紫もやしィ！」

「あなたは人から見てそういう人間ってことよ白金チワワ。」

「ブフツ」

「チワワじゃねえ！ 笑うなぶつ殺すぞクソがっ!!」

「ちよ、ば、パチエちゃん、かつちゃんも怒ってるから、そのへんで、：クツ、や、やめといった方が：フフツ」

「デメエも笑ってんじやねえクソデク！」

その形相を見ても先程の単語のおかげで爆豪の顔をまともに見ることが出来ない数名。だが彼の「ぜつてえ殺す・・」という眩きでシンとおとなしくなった。

しかし少しづつぎわめきを大きくながら何事もなかったかのように雑談をし始める生徒達。パチユリーはまた別の本を取り出して読み始める。

「もう付くぞ。いい加減にしろお前達。」

「[[[[はっ！]]]]」

○●○

バスが止まり、相澤が「着いたぞ。」と一声かける。ワクワクした表情で彼らは速やかに彼の後ろへと続き、歩きつつ、前の人物の頭の横から、そして見上げるようにその建物を見た。

外観はドーム型で、その真ん前には一人の人？と思わしき人物が立っている。

「皆さん、待ってましたよ。」

全員を確認するように見回すと、言葉をかけて一行を出迎えた。それは真つ白な宇宙服を着た人物で、彼も英雄の職員ということからほとんどは彼を期待のまなざしで見つめている。

「うわあ〜！スペースヒーロー《13号》だ!!災害救助でめざましい活躍をしている紳士的なヒーロー!!」

「私好きなのっ！13号!」

そしてヒーローに会えたという興奮で解説を述べる緑谷とキラキラとした目で言う麗日。約一名はいつも通りの行動だ。

「早速中に入りましょう。」

「『『『よろしくお願いします。』』』」

13号に先導され、真剣というよりもこの先にあるものに対する期待に胸を膨らませる生徒達。対してパチュリー、爆豪、轟の三名はいつも通りの表情で足を進める。

どっちにしろ授業であることには変わりはない。ならばまず冷静に見つめることだと他の何名かも真剣な表情になった。

入り口から下に向けて伸びる長い階段をざわめき一つ起こさずに下り続ける。それぞれの足音が宙に響いていつぱいになるころには、全員が最後の一段を下り終えた。

その先にあったのは、大きな噴水広場。そして、噴水の広場を中心にして様々な建物が彼らの目の前に広がっていた。

「すっげえー！ U S J かよ!!」

そんな切島の声が続いて、何人かの生徒が驚きの声を上げる。

(U S J ってこんな建物なのね。よく知らないけど。)

隣にいる麗日、緑谷が声を上げている中、パチュリー一人だけはそんなことを心の中で呟いていた。彼女はU S J などのテーマパークに何ら興味関心が無い。知っているものは両親が昔連れて行ったものだけだ。

「水難事故、土砂災害、火災、暴風、^{エトセトラ} e t c . . . あらゆる事故や災害を想定し僕が作った

演習場です。

その名も、ウソの災害や事故ルーム！略してUSJ！」

（（本当にUSJだった・・・！））

（もつとほかの名前無かったのかしら。）

本来ものを知っているかどうかで変わってくる名前の認識。彼女はなぜ同じようにしたのかと疑問を抱いた。

13号は各々の反応を見た後、建物を指しながら話し始める。

「オールマイトは？ここで待ち合わせのはずだが」

「先輩それが……」

教師二人は生徒から少し離れて話し合う。パチユリーは少し聞き耳を立てて内容を聞いていた。

どうやらオールマイトが通勤中に人助けを行ってマッスルフォームが維持できなくなっているらしい。彼女と相澤はそれを聞いてこう思った。

（（不合理極まりない。））

そして同時にため息をつく。ちなみにどちらも目が死んでいる。

ヒーローとしては素晴らしい行動ではある。予想はしていたが、自分が今ヒーローと

しての活動が短くなってきている上に、教師としてその行動はどーよ。と、パチュリーは思った。

「先に始めましょう」という13号の言葉とともに、イライラとした表情で一度ため息をつく相澤。

「それでは始める前にお小言を1つ2つ、……3つ4つ5つ6つ……」

（（増える……！））

「皆さんご存知かと思いますが、僕の個性はブラックホール。どんなものでも吸い込んでチリにしています。」

「その個性でどんな災害からも人を救い上げるんですよね！」

その言葉に「ええ。」と返し、

「しかし、人を簡単に殺せる個性でもありません。」

と続けた。 “人を簡単に殺せる。” その言葉に反応してか、生徒全員の顔が引き締まる。

「人を殺せてしまう個性……みなさんの中にもそういう個性を持った人はいると思います。」

超人社会は個性使用を資格制度の下厳しく管理し規制することで一見成り立っているように見えます。

しかし一歩間違えれば容易に人を殺せる危険な個性を個々が持っている、そのことを忘れないでください」

13号はぐるりと生徒らを見回す。ある生徒は自分の手のひらを開いたり閉じたりしながら、ある生徒は拳をギュツと握りしめて目を瞑りながら、各々その言葉を心の中に刻み込んでいた。

「相澤先生の体力テストで自身の力が秘めている可能性を知り、オールマイトの戦闘訓練でそれを人に向ける危うさを体感したかと思えます。

この授業では心機一転！人命のための個性の活用法について学んでいきましょう。君たちのその個性は人を傷付けるためにあるのでは無い。人を助けるために在るのだと心得てくださいな。

——以上。ご清聴ありがとうございました」

「素敵〜！」

「ブラボー！」

個性というものは人を容易く殺せてしまう。

パチュリーの個性が良い例だ。『魔法使い』という個性は一見便利に見えるが、それとは裏腹に危険性を含んでいる。彼女が扱っている七曜の魔法は、その圧倒的な威力によって敵を倒すのに最適だ。

力加減を間違えてしまえばどうなるかは想像に難くないだろう。

それらの困難を超えてこそ、ヒーロー。

13号の個性でもそうだ。どんなものでも塵に変えられてしまう危険なもの。しかし彼はそれを人助けのために使っている。

だからこそ、彼がこの訓練の講師として適任なのだろう。

(ブラックホール……。危険な個性をよく制御できるわねえ。)

パチュリーは先生の話を頭の中に入れる。

——瞬間、彼女は背筋に凍てつくような寒気を感じた。

(……!?何!?これは、一体……?)

急いで周囲確認を行うパチュリー。彼女がその存在に気付くのに時間はかからなかった。

それは、不自然な黒い霧^{モヤ}。

「——っ、イレイザーヘッド!」

「——なんだっ……一かたまりになって動くな!13号、生徒を守れ!」

指示は早かった。13号はいつでも個性が発動できるよう構え、パチュリーは本を取

り出して開く。

視界のど真ん中に、それは現れた。

「先日頂いた教員カリキュラムではオールマイトがここにいるはずなのですが」

黒いモヤモヤとした人物と、手の様なオブジェクトを顔に着けた人物。

（侵入者ね。セキュリティが機能していないところを見ると妨害かワープ系。恐らく後者。人数にもよるけど、このタイミングは増援を遅らせるために狙ったものね。プロヒーローの教師陣が居るのに何も考えず襲撃なんてよっほどの阿呆じゃないと出来ない。つまり彼等には何か勝てる見込みがる。そして、狙ったのならこちらの時間を把握する術があるということ。∴味方の中に悪いのが入り込んでる可能性もあるわ。一応警戒しましょう。）

探知魔法の結果は∴、何よこれ!?)

パチュリーは目を見開いた。彼女の持っている本にはUSJ内の地図と人が丸いマークで表されていた。

マークはこのエリアだけではなく、他のエリアにも表示されている。

この大人数をセキュリティ妨害だけ連れてくるには無理がある。恐らくワープ系もだと彼女は確信した。

「どこだよ？せつかくこんな大衆引き連れて来たのにさ。」

……子どもを殺せば来るのかな？」

その言葉は、ゲームを行う子供のようだった。悪意を見せ、たくさんの手の様なオブジェの下の表情を邪悪に歪ませる。

「何だアリヤ？また入試ん時みたいなの、もう始まってんぞパターン？」

状況を飲み込めていない切島。他の何人かもまだ混乱していて判断が出来ていない。

ざわつく彼ら。状況整理が出来ているのはたった数人。

——危険だ。

「違う、これはもう訓練なんかじゃないわ。アイツらは、」

「動くな、あれは」

「「ヴィランだよ！」」

その言葉に呆気にとられるも、すぐさま行動できるものがあるところは流石と言えよう。

一部反応できていないものもいるが、これならば避難は出来そうだと彼女は思った。

「侵入者用のセンサーは!?!」

「センサーが反応しねえならそういう妨害の個性持ちが向こうにいるんだろ。」

校舎と離された隔離空間。そこにクラスが入る時間割。バカだがアホじゃねえ。

……これはなんらかの目的のために用意周到に画策された奇襲だ」

轟が冷静に分析する。推薦を受け合格した一人だからか、他の生徒よりも現段階で判断力は少し上回っている。

「イレイザーヘッド、他エリアにも大勢紛れ込んでいるわ。」

「……どうやってそれを?」

「この本のおかげよ。」

彼女はそう言っつて本を手で少し持ち上げて見せる。

「…:そうか。本当そつくりだな。」

——お前と上鳴は個性で連絡試せ。」

「了解。」

そう返事をした彼女は、早速目を閉じてブツブツと何かを唱える。俗にいうテレパシーだ。

(……—……—おかしいわね。)

テレパシーを使ってみるも、彼女の脳内にはノイズ音が響くだけ。どこにも繋がらない。仕方なしにと転移魔法を試してみるが何かに阻まれているのか転移することが出来ない。

彼女は目を大きく見開いた。まさか相澤の視界に入っているんじゃないかと彼の方角を見るが、彼はヴィランの動きを見ているだけで、こちらには向いていない。

それが意味するものは……

「上鳴、繋がった!？」

「……いや、ダメだ!」

「やっぱり……!」

「そっちは?」

「ダメ。使える手段は使ってみたけど、全然繋がらないわ。」

「マジかよ!？」

驚くも思考をフルに回転させ、彼女は何かまだ使える物が無いか画策する。

(テレパシーと転移魔法が使えない。つまりは魔法的な何かも遮る個性を持っている奴がいるってこと。)

……こうなったらコレを使うしかないわね……)

彼女は羽織っているローブの右腕の袖に左手を突っ込んである物体を取り出した。

それは、彼女が幼いころに賢者から貰った連絡用具——陰陽玉。

魔力を込めればスキマ空間を経由して対応している玉全部に繋がらせることが出来る便利な連絡道具。一つは賢者、もう一つは彼女の自宅にいるアリスが所有している。

(とりあえず、外との連絡をとらなく「おやおや、それを使われると少し面倒なんですよねえ。」……!?)

彼女は突然聞こえてきたその声に驚き、陰陽玉を手から落としてしまった。

カーンと甲高い音を響かせて転がるそれに、焦ってパチユリーは手を伸ばそうとする。

「と、いうわけで。少しの間こちらに来ていただきますよ?ちなみに貴女に拒否権はありませんのでご容赦ください。」

瞬間、強い眠気が彼女を襲う。立ち上がろうとするも、前のめりでバランスを取ることでできなかつた彼女の視界はぐらりと揺らぎ、バタリと倒れてしまった。

霧に包まれたようにぼんやりと、彼女の思考が思考が低下する。視界が白み、体はもう動かすこともままならない。ついに彼女の意識は、彼女自身から放棄された。

そして、彼女はそこから文字通り姿を消した。

深く、深く、更なる深みへと彼女は落ちていく。沈むように。水の中へと潜っていくような浮遊感と心地のよさを感じながら。

ふと、彼女の耳に誰かの呼ばれる声が聞こえた気がした。

T o b e c o n t i n u e d . . .